



Title	あるディアスポラの知識人による台湾独立運動：張繼昭 (Andy Chang) と「台北俳句会」の事例をもとにして
Author(s)	染川, 清美
Citation	文化/批評. 2012, 4, p. 33-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75772
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

あるディアスポラの知識人による台湾独立運動

—張繼昭 (Andy Chang) と「台北俳句会」の事例をもとにして—

染川清美

はじめに

本稿は、張繼昭 (Andy Chang 1934 ~) の歴史的経験と記憶から、その主張する台湾独立運動¹⁾に到るまでと、ディアスポラとしての台湾独立活動について論点を絞る。しかし、それは単に歴史的経験と記憶のみに留まらず、台湾に在る日本語俳句会「台北俳句会」との関わりによって、庶民のささやかな嗜みである俳句創作の営みの中に、影を落とす政治性をも追求することになる。そしてまた、政治活動を推進する現在の張の置かれた位置と未来性を、分析・展望することでもある。

張は、「政治に関わらない」(政党支持に関わることや、過去戒厳令下では、支配者だった日本を最厲すること等を指す)ことを不文律とする²⁾「台北俳句会」に席を置き、戦後留学帰化したアメリカ・カリフォルニアの地から出自の台湾と日本等に向け、台湾独立の呼びかけをするディアスポラの知識人である。

本稿での台湾独立運動は、台湾以外の他国での活動を中心に置く。国民党が中国大陸から敗走して、台北に台湾政府を開いた前年の1947年に起きた2.28事件³⁾を契機としている。その後の国民党政府の弾圧によって、台湾島内での政府排除のための台湾独立活動は、困難になった。そのため事件直後から、日本を始めとする世界の各地に活動家は逃れ、1950年代から70年代にかけて、台湾から留学している学生達に呼びかけて、外国からの台湾独立活動を開始した。当時東京で台湾独立活動の母体となった台湾青年社の一員が、今なお現役で台湾に在住する。これら過去の台湾独立活動の歴史の中で、張は彼らと共に行動をしていない。2000年代の民進党政権になってからの活動家である。従って張の台湾独立運動の契機も活動も、何ら過去の運動との繋がりはない。

ここにこの論題を提示したのは、外国から活動を存続する張と、「政治に関わらない」ことで台湾に生き抜く方策をとる「台北俳句会」との関わりから、現在台湾が置かれている世界の中の立ち位置が見え、台湾の独立運動と大きく関わっていることを立証すると考えるからである。台湾の政治情勢は、台湾の歴史のみに留まらず、中国・日本・アメリカを含む世界の関心事であることは自明であり、今後の国際情勢に関連して重要な意義があ

ることと思う。

先ず本稿でいう知識人とは、どのような存在なのかを考える。エドワード・W・サイードは、2つのタイプに分けたグラムシの立論を引用している。ひとつは、「教師や聖職者や行政管理者といった伝統的知識人」であり、いまひとつは「有機的知識人」である。グラムシによれば、「有機的知識人は階級なり運動と、それとも、知識人を利用して支配権の拡張をはかる階級なり運動と直接結びつく」としているもので、「他方の教師や聖職者と違って、いつも動いているし、成長している」とする。ここでは、この後者の範囲に属するものであり、また同書でサイードがジュリアン・バンダの定義を引用して、尚且つ「知識人が真の知識人といえるのは、形而上的で高尚な理念に衝き動かされつつ、公正無私な、真実と正義の原則に則って、腐敗を糾弾し、弱きを助け、欠陥のある抑圧的な権威にどこみかかるときだ」⁴⁾とする部分が、知識人としての張にふさわしい言葉である。この人物像を分析・描写していく中で、そのことは判明可能であるし、張と対峙する側から評すれば、知識人とは言えないかもしれない。筆者はここで、どちら側の誰をテーマにしても、主人公の生き方の正当性よりも、如何に生きているかその生き様に視点を当て、客観的に分析したいのである。

ところでディアスポラの知識人とは、簡潔に言うならば、「自分の国を出て、外国の地から出自の国に向けて物を言うこと」である。もともとディアスポラとは、戦争や迫害などによって自らの意志に関係なく自国を追放され、やむなく強制的に外国の地に移動・離散させられ、自国に戻れない者達、例えばユダヤ民族などについて、イグザイル(放浪の民)という語句と共に用いられてきた言葉である。しかし現在では、かなりその意味する範囲が拡大されてきている。例えばサイードの言葉をまとめるならば、今日の世界では故郷からまったく切り離されているのではなく、いつもそれを思い起こさせるものと接触し、じらされるだけで満たされない苦い思いがついてまわるという中間的状況に位置づけられる。この不安定などちつかずの立場を常に感じながら生きることを余儀なくされている者であり、こうした苛立たしい中間的存在であるのが、ディアスポラの知識人⁵⁾なのである。従って本稿では、他国にありながら、出自の土地へ往來しつつも、その土地へ向けて自己の信条を主張する人々の総称とする。

レイ・チョウ(周蕾)は自著⁶⁾で、「私はいま、離散状況にあるディアスポラ人、北アメリカに住む香港の人間として書いている」と自称しているから、この書をもって米国から出自の香港を取り込む中国へ向けて、中国の政治・教育・人民等諸事について分析・批評するディアスポラであり、その基盤に「香港における昨今の政治的雰囲気は、私に言わせれば矛盾に満ちたものだ。香港と中国との歴史的差異が、本土とは全く相入れないほど

強調されるべきまさにこのときに、中華化の力が信じがたいほど強くなってきているのだから」との思いがある。その思いは、後述の張の思いと共通している。上野俊哉は、「移動や亡命状態を表す他の言葉や概念とはさしあたり区別して論じられなければならない」⁷⁾とするが、筆者は広義にとらえて、張をタイトル通りに規定する。張がそれであることは、逐次分析する中から解明される。

張は俳句と「台北俳句会」において、台湾独立を表現できないばかりか、その俳句会内では政治的活動も出来ない。だが、文学に造詣深い故に、「台北俳句会」の会員として台湾に繋がり、米国や台湾・日本で講演活動を行い AC 通信⁸⁾ (資料Ⅱ-2 参照) によって多数の受信者を持ち、また著作 (AC 通信を基にまとめたシリーズ)⁹⁾ によっても台湾独立を説く。また台・日・米等各地で講演会を開催し、AC 通信の内容を心情に訴える (資料Ⅰ参照)。更に「台湾人民建国宣言」をニューヨークタイムズ広告欄に掲載し (資料Ⅱ-1 参照)、また米国政府高官に請願し (資料Ⅲ参照)、東アジア広域にわたって署名活動を展開しようとする。これら張の台湾独立論とその活動の源流は何か。特に少数の代行者¹⁰⁾ たちによる戦後台湾歴史の経験と記憶が彼の思想を養成したこと、「台北俳句会」の暗黙の規約が、日本語禁止令の戒厳令下で生き残る方策であったことと関わらせながら、彼の著書等を基に進める。世界における台湾そのものの立ち位置が張の台湾独立主張の背景となって、その困難性・混迷性を表出する。台湾人ディアスポラの知識人として台湾独立を呼びかける張の活動は、その他多くの活動家の中において、注目に値する存在であろう。

しかしなぜ張は、異国で台湾独立を主張するのか。ここには、台湾の歴史的な経験、とりわけ近代以降の歴史経験と記憶が関係していると考えられる。張が戦後アメリカに留学帰化し、台湾に戻らないという事実が、そのことを象徴する。戻れないとの意識を持ちつつ、台湾の現状に危惧を持ち、政治活動に奔走せざるを得ない心情を分析したい。

台湾は戦前、帝国日本による植民地主義的政策の支配を受けた。そして1945年以降台湾は、中国大陸を追われてきた国民党政府の支配下に置かれた。それら各時代によって台湾の支配者は変遷したが、台湾に戦前から居住し結果的に被支配者に追いやられざるを得なかった台湾人は、様々な側面で被支配者としての経験を強いられてきたという意識があることは、否定できない。その二重植民地の被植民意識は、幾つかの論文¹¹⁾ に取り上げられてきた。それは、日本統治時代を経験した日本語を母語とした世代に、特に顕著である。

本稿では、張の台湾独立論が持つ背景と意味と展望を述べることにする。台湾独立運動についての先行論文は、独立運動に至る台湾の歴史的根柢について論じたもの¹²⁾、その根柢の一翼となった代行者を重視したもの¹³⁾、独立運動を台・日・米に亘って詳述した

もの¹⁴⁾や、公然化した独立運動を台湾に関わる日・米・中三国の歴史を含んで述べたもの¹⁵⁾と、2000年の台湾総選挙を目の当たりにした学者の眼で捉え、独立運動と2000年台湾総選挙後の新情勢について述べたもの¹⁶⁾がある。また個人の事例を研究したものというよりは、独立運動をした本人が台湾独立運動にかけた自己の闘争12年を著したものの¹⁷⁾や、自己の体験的・自伝的台湾論を基に、台湾の国際法上の地位を法的視座から分析したもの¹⁸⁾があり、また、「祖国統一」と「台湾独立」の狭間で、台湾問題に具体的に焦点を絞って考察したもの¹⁹⁾もあるが、移動やディアスポラの視座から知識人をテーマに追跡調査したものはない。その部分については、張の「私の俳句歴」を基にした個人の事例を、戦後台湾における米国留学事情を台米双方から多角的に考察したもの²⁰⁾と、張が在住する米国の華人、特に台湾人コミュニティを論じたもの²¹⁾に照合しつつ、張の台湾独立運動の背景と軌跡を検証する。張と「台北俳句会」との関係は、台北の日本語文芸活動から論じたもの²²⁾より分析し、AC通信の対象受信者と独立運動に関わっては、若林の議論を参照する。更に、独立運動にかけた台湾人学者の40年ぶりの帰国に同行取材した記事²³⁾と、日本で台湾独立運動に奔走していた頃の事を台湾の学者夫妻にインタビューしたもの²⁴⁾とを実証例とする。同時に張の活動ツールであるAC通信を始めとして、先述の各種の著作と活動を参照引用し、筆者から張への質問に対する回答と資料のEメールと、「台湾独立運動関連年表」(1945-2002年)・『NEWSWEEK』・『朝日ジャーナル』の参照とで、更なる詳細な分析を試みる方法を探った。

1. 張継昭から Andy Chang への軌跡

1-1. Andy Chang と呼ばれることの意味

張は1934年台湾嘉義生まれである。彼の綴った「私の俳句歴」²⁵⁾を基に、その略歴から見えてくるものを考察する。「私の俳句歴」は、筆者が会員の「俳句自分史」を基に、戦後台湾の戒厳令下で日本語俳句を詠むことについて考察する意図で、希望者に募ったものであり、寄稿された中の一事例である。「俳句自分史」の内容は、自由記述でよいが、俳句との出会いとその頃の社会状況、更に「台北俳句会」に入ってから詠んだ代表作、また日本語俳句を詠む理由とそれに対する周囲の反応、「台北俳句会」の今後について等、数項目を例示し、その中から自分の書きたいものを選択する方法をとった。それ以外に自分の言いたいことを重点的に述べた人もいる。そして更に後日、寄稿者各自の「俳句自分史」について、聞き取りを実施し補強している。

私の名前は張繼昭と言いますが、アメリカ国籍を取得してからは Andre Chang、普通は Andy で通っています。台湾に生まれ育った人間の『土地なき民の悲しみ』²⁶⁾ は、同じ漢字の名前でも幾通りの違った読み方があり、米国の名前やいくつもあるペンネームを入れるともっと多くなります。

以下は上記引用内容についての、張自身の説明である。

『土地なき民の悲しみ』は、小学三年の時家にあった、ポーランド独立を書いた全三冊のタイトルで、『土地なき民』はディアスポラのこと、台湾は日本植民地から中国の奴隷国家になって、私や多くの台湾人が同じ道を歩んでいるが、ユダヤ人のように外国に移住して故郷の独立を願っている人間のことです。アメリカに留学しても、祖国の建設に尽力することができない。中華民国とは中国人が台湾人を奴隷扱いにしていく専制政権であり、この『悲しみ』は、外国にいて故郷を思う者達の心境です。²⁷⁾

「私の俳句歴」は、2006年に筆者が「台北俳句会」会員に向けて募集したものであるから、筆者は当時この語句に注目することなく、俳句を中心に考察していた。しかし年を経るにつれて、「台北俳句会」が台湾において、その存続を如何に確保しようと苦闘してきたかを解明していくうちに、会員のひとりで外国の地から参加している張繼昭に行き当たった²⁸⁾。「私の俳句歴」は一見、何の取り立てて論ずることもなさそうな文面であるが、実は張が主張する台湾独立論に関わる台湾の歴史的経験と記憶が、諸々内包されているのであった。上記の張自身の解説の「土地なき民」「専制政治」等の語句に、客観的には多少感情的に聞こえるが、それらは滲み出ているのである。

更に張の同じEメールの説明を続けると、「同じ漢字の名前でもいく通りの違った読み方があり、米国の名前やいくつもあるペンネーム」(「」内は、張のEメールの引用 以下同様)について、「生まれ育った時は日本語でチョウケイショウと呼ばれていた。終戦後は台湾語の呼び名でティオケーチャウ、この呼び名にまだ馴染めないうちに、中学では中国暦のチャンチーチャウ、これは大嫌いだけれど、パスポートにも標記されている名前。チャンと呼ばれるのが嫌いだからアメリカに渡ってすぐに、Andre を使い出した。なぜ Andre かというと、心はやはりアメリカに馴染めないからフランス式の名前で日本語のアクラを Andre とした。このように外国で暮らす台湾人の多くは、外国名を使うようになる。中国語で呼ばれるのが嫌だから、英語の名前で呼ばれるようにしたい、そのうちアメリカの生活にも慣れ、アメリカに帰化し、多くのアメリカ人はアンディと呼ぶようになった。

それで、ペンネームを考えた時は『暗地』とした。『暗地』を中国語でアンディと発音する。暗い土地とは、土地なき民の心境、つまりディアスポラの心です。ところが台湾人の(AC通信の)読者から、何故中国語を使うのかと聞かれて困った。なるほどこれは台湾語読みではアンディにはならない。そこで最終的に『紅柿』は台湾語で発音するとアキラです」とする。

侵略された国や人々が、侵略者側の言語と氏名を強制されるのは歴史上の常であるが、同様にそれは、台湾の歴史にも色濃く込められている。日本植民地支配から中国国民党の支配、言うなれば代行時代となり、国語は日本語から中国語へ変えられ、国民党を中心とした政策を不満とする者の中には、海外に出て行く人々もいる。それは人々が否応なしに影響されざるを得ないその状況に追込まれる結果とみられる。そしてまた、その海外の事情に適応して個人の名前も変化させていく。個人の名前の変化は、台湾人の移動の軌跡と心情の起伏をも無意識的あるいは意識的に反映させているのである。殊にアキラは日本名である。しかも彼の著書で、ワシントンでの生活を描いたエッセイ風小説『フライデイ・ランチクラブ』²⁹⁾と小説風半自叙伝『不幸のカルテ』³⁰⁾の主人公名が、アキラなのである。この日本名をどう解釈するかは、後述する。

更に「私の俳句歴」に戻ってまとめると、そのことが例示される。

張の生まれは昭和9年で、台湾では日本語世代の最後に属する。父は医者の家系に生まれた医者三代目で、京都帝大の医学博士である³¹⁾。母は彰化高女を出て父に嫁ぎ、京都で6年ほど過した。張は生まれた時から日本語で育ち、日本語教育は小学校三年と一学期だけである。四年生の時に米軍の空襲が激しくなり田舎に疎開し、日本語教育はそれだけとなった。1957年台南にある成功大学の採鉱科を卒業、1959年に兵役を済ませてすぐアメリカへ留学した。ミズーリ大学修士、テキサスのライス大学地球物理(地震学)博士を取得した。92年までアメリカで地震学関係の仕事をしてきた。

ところで戦前の留学先が日本であることは、日本の植民地であれば言うまでもなく、日本政府としても優秀な人材は台湾に貢献させるべく、日本への留学を推進した。その当時張の父は日本で留学生活を送り、嫁いだ母と共に帰台して子ども5人を育て上げた。そして父同様日本に留学させた長男・長女・次男のうち二人の息子は医者に、長女は医者に嫁がせ、日本に永住させた。三男の張と次女の末娘がアメリカへ留学した経緯は、張の前掲書『フライデイ・ランチクラブ』と『不幸のカルテ』に詳しい。

ところで張は、上の兄弟三人が日本に留学したのに対して、日本の敗戦を機に留学先を米国にした。当時1950年代から80年代にかけての台湾における米国留学についての事情は、成瀬千枝子の「戦後台湾におけるアメリカ留学(Ⅰ)(Ⅱ)」³²⁾に詳述されており、張

が留学後も帰台出来なかった事情も提示されている。

張自身も、「中国人の台湾人に対する差別統治に不満をもってアメリカに渡った人間は」³³⁾と書き、「留学するならアメリカが一番、ことに理工科はそうだった。ところが入学して分かったのは、台湾では炭鉱と石油の他に職がない。しかも当時の学生はみな、中国人の白色恐怖政治に抵抗して留学を考えていた。台湾人の大学生は殆んどアメリカに留学して、中国人の独裁政權から逃れたかった。だから私は大学3年で既にアメリカ留学の許可を取っていた。留学するなら復興期の日本ではなくアメリカという一般風潮で、みんな留学したら帰らない決心だった」³⁴⁾と当時の状況を述べる。

成瀬によると、それだけの理由ではなかった。

戦後台湾においては、1950年から1999年までの間に、未曾有の留学ブームが起こり、多くの若者が米国を留学国として選んだ。特に1980年代半ばにかけて、8万5千人あまりが台湾から留学し、その9割がアメリカに留学している。1954年国民党政府遷台初公布の改訂「国外留学規定」には、留学試験に合格すると、男子は軍事訓練の終了後出国が許可されるとしていた。それを終えて留学した彼らのおよそ9割は、戦前とは対照的に学業終了後も帰国せず、ビザの留學生資格を移民の資格に変更して、米国に残留したのである。

張が1959年に渡米したのも丁度その頃であったから、前述の彼自身の記憶と当時の社会状況とは符号する。そしてそのまま米国に残留した理由を、さらに成瀬の前稿の中からまとめると、次のようになる。1) 中華民国が1949年内戦に敗れて台湾に撤退して以来、アメリカ政府は「緊急援助留美学生計画」を執行して、米国に残留する留學生に多額の支援を行い、1950年朝鮮戦争勃発後、中華人民共和国封じ込め政策の一環として、中華民国国民党の政府に対して、経済的・軍事的援助も行った。大陸からの武力攻撃を恐れていた台湾の人々は、米国への依頼心が強まり、アメリカを盲目的に崇拝する風潮が広まった。2) 台湾では、遷台したばかりの国民党政府が、「大陸反攻」を国是として戒嚴令を發布し、人々は言論・思想の自由を奪われ、経済や教育は混乱に陥り、政府の政治上の厳しい統制の下での生活をするよりは、対照的なアメリカでの生活を選択した。3) 台湾内の就職難は、戦後の日本を含む外地からの大量帰台による就職難のためであった。この点について台湾では、公務員は殆んど中国人で占められているという意識が、戦後から現在に至るまで、台湾人の持つ不満のひとつであるという。先の「俳句に関わる自分史」の事例の中にも、そのことは挙げられている³⁵⁾。4) その他台湾の将来が不確実であったために、外省人の子弟でさえ帰台させずに米国に残留させた。何時中国に帰れるか不確定であるし、中華民国の国連脱退に関連する台米・台日国交断絶など台湾の孤立が深まる中での事情があ

った。そして留学はある種のステイタスとなって、50年代60年代初期は外省人のそれが多かったが、次第に力をつけた台湾人の子弟も増え、米国を目指す若者が増加していったという。この論文で興味を引くのは、外省人の子弟が、積極的に米国に留学したということであろう。当時の米・台・中そして日本の関係が複雑であったことの証であろうが、それらの米国政府の中華民国からの留学生への支援は、公務員を殆んど占める外省人子弟に向けられたという本省人の怒りの声が聞こえそうであるが、力をつけた本省人が、その選抜を勝ち抜いていったのであろう。

先に挙げた2)の中に白色テロ(白色恐怖政治)の記述はないが、前述の張の記憶は、事件が起こってその肅清が生々しい痕跡と記憶を継続する時期だけに、その恐怖が留学とその先での残留を後押ししたことは、否定できない。つい最近のAC通信³⁶⁾にも、「2.28」を忘れるという内容がある。成瀬の調査にこの事件が含まれないのは、調査が公的資料に基づいたものであり、当時の本省人の生の声の資料が少ないためであろう。成瀬が北米華人社会を、特に女性移民を中心に研究していたとは言え、この種の事例は多くあるのではないか。その部分において張の当時の留学生としての本音が、拙論³⁷⁾によって語られるのである。また張は、兄弟上の三人が日本留学時に親からの多大の支援を得ていたにも拘らず、自分は独力で奨学金だけで留學生活をし、妹まで引き受け、最終的に結婚後は両親まで米国に引き取るという経緯を、前掲書に記している。それが可能だったのは、台湾からの留学生には特に、奨学援助を厚くし、移民法改正をしてさえ優秀人材を確保したいという対中政策事情が、米国政府側にあったと言えよう。当時張は政治的な広範な情報は入手できる立場にはなかったろうし、台湾における若者達の、ただただ不安な現状と将来への不確実性から離脱し、二度と帰らぬ覚悟で自由と希望を求めて米国へ留学していったのであろう。

以上のことから、張の現在に至る人生に起こった経験とその記憶は、台湾の戦後の歴史と社会事情をそのまま反映したものであったのである。

1-2. 張と「台北俳句会」

続いて俳句との関係を、同じく張の「私の俳句歴」から考察する。引用はごく一部分である。「俳句を始めたのはまったくの偶然から母は台北俳句会の創立当初からの会員でしたので、台北俳句会の俳句集は時々読んでいましたが、アメリカで暮らしているので別に俳句を始めるとは思っていなかったのです。92年になって俳句会の会員に無理やり入会させられたのが実情で、その後はアメリカから投句する会員、母子二代の俳句会員は母と私だけです」と、俳句との関わりを述べ始める。そして俳句を始めて俳句の難しさを知

り、俳句の奥の深さがわかった、彼のような評論を書く者にとって、俳句は簡潔明瞭を最良とする訓練となったと言う。以下、その代表作を張自身が選句した中からの5句である。

ポインセチア真っ赤な嘘が風に揺れ	1995年
薄暑かな体臭薄く老いにけり	1998年
それぞれに違ひそれぞれ紅葉かな	2000年
牧牛の烙印あはれ夏の雲	2005年
なんとなく「膨張係数」木々芽吹く	2006年

俳句は詩であるといっても、花鳥風月、生活俳句、老病俳句、父母兄弟俳句などいろいろあり、基本的には「いま、ここ、われ」を俳句の真髓と心がけております。自己と時空、自己と自然が一体となることの詩です。漢字俳句はやっておりません。漢詩にはすでに確立した五言、七言の形式があり、俳句をまねる必要もないし、漢字で三五三の形式にして無理やりに詰め込む事にも疑問があります。むしろ和歌の五七五七七の形式で漢詩を作るほうが適していると思います。英詩の俳句形短詩は開発の余地もあるかもしれませんが。台北俳句会は基本的に日本語世代のもので、若い世代を育てることに苦心しなければ自然に衰退してしまう恐れがあります。私はアメリカに住んでいるので台湾の次の世代を育てることができず、黄靈芝先生に頼るほかありません。

以上は、張の俳句観である。俳句にも俳句観にも彼の主張する「台湾独立論」の表現はない。それというのも、彼が「台北俳句会」に入会を勧められたときは1992年であったが、

参加と同時に政治のことは書かない、言わないように注意を受けました。俳句会が成立したのは40年前のことで、まだ戒厳令が敷かれていた時代ですから、文学の集いと雖もさっそく国民党の注意を受け、スパイが句会に参入してきたのです。もちろん私が参加したから、と言うものではありません。何かの理由で退会し、また入ってきただけの事です。誰もこういうことは表立って言わないけど、すぐ会員たちの知る事となるそうです。今でも俳句会の中には国民党員(筆者は支持者と聞いている)がいます。これは事実です。私の記事はいつどのように転載なさってもかまいません。俳句会の人々は台湾で特務の監視下で生活してきたので、今でも国民党に対する恐怖心が

ありますが、私にはありません。この数年の間二十数回も台湾で独立建国の為に講演会を行ってきましたが、尾行はなかったようです。或いは尾行が巧妙なので気がつかなかったのかもしれませんが³⁸⁾。

と、入会当初に釘を刺されていた事情を述べている。従ってこの「台北俳句会」では、張が政治活動をしている人という認識はなく、ごく一部の親友のみ知るという。

それでは何故「台北俳句会」と繋がっているのか。それは張の生い立ちの環境から来ると考えられる。「母は当時の女学校の図書館の本を全部読みきったほどの読書好きで、家には本がたくさんあったけど、私だけが母親の血を受け継いでいたようで、小さい時から本を読むのが好きでした。戦争で米軍機の空襲がひどくなって、田舎に疎開するまでに(小学校4年)本棚の本を全部読みきったのは、私一人だけです。夏目漱石全集、明治大正文学全集などは戦後読みました」とあるように、「わたしの俳句歴」の冒頭の『土地なき民』などの書物は、小学校三年までに張の家庭の本棚から読まれたものの一冊であり、それが現在のわが身になろうとは、張自身も予期しなかったことであろう。第一次世界大戦と第二次世界大戦に翻弄されて土地を奪われ、国を捨てて国外に職を求めて出ていくポーランドの農民達の姿を、殊に米国に出稼ぎに来た自分自身を重ね合わせて、彼の思いは出自の土地台湾へと馳せるのであろう。

このように、家庭環境によって育まれた物書きの才能は、自分の専門職以外の分野であるAC通信や小説・評論の領域に生かされ、俳句や川柳を詠む原動力となっていると思われる。従って、政治活動とは一線を画していても、この文芸活動は張の台湾独立運動のエネルギー源となって、台湾に繋がっているのではないか。更に言えば、日本に対する好ましい記憶を持続させるために、不可欠のものとなっているのではないか。

ところでここで、黄智慧の「ポストコロニアル都市の非情」³⁹⁾における俳句の扱いについて考察してみよう。黄は、戦後の台湾における日本起源の短詩文芸である短歌・俳句・川柳の例を挙げて、日本植民地期から次の來台国民党政府に向けての抵抗の証として、「指を折り短歌詠み居れば忘れ居し大和言葉が次々と湧く」「日本語を本気でしゃべる終戦後」等を筆頭として、短歌・川柳に込められた新政府への反感或いは日本最良の内容を込めた短詩を諸々挙げている。これらの短詩は、マスメディアにおける日本語禁止令を含む戒厳令、そしてそれからの解放という史実を背景に、そしてその解放から出来たものである。ところが、俳句に関してはその種の内容の列句は挙げられていない。黄が言うように「新来の統治者(国民党)は日本語を聞いても分からないから」とし、これらは「二重植民後の抵抗の形態である」と言うのであれば、俳句も同様に抵抗や日本最良の句が例示される

べきであるが、それはない。ということは、それらを見つけられなかったのではないか。

即ち冒頭に犯人を明かしてしまった推理小説のごとく、筆者は「台北俳句会」では政治的な内容の俳句は、禁止されていたと始めに明かしているのだが、張は政治活動家である故に、参加当初に「政治に関わらない」決まりを聞かされていたのだった。張から筆者がそのことを知らされたのはかなり後であって、それまでに筆者は、その「台北俳句会」独自の暗黙の禁止令に辿り着くまで、これら短詩文芸の短歌・川柳との比較にかなりの時間を費やしていたのであった。そのため、「台北俳句会」主宰の黄靈芝に直接問うてみたが、「この俳句会に政治的な俳句を見つけるのは難しいでしょう。」「私は別に政治を詠んではいけないとは言っていない。ただ句会は会員みなのものであり、個人の作が何かのとばっちりで他の会員に迷惑のかかる恐れがあり得ることを、その危険性を警戒したい。物事はこじつければ何とでも解釈できるもの、政治はからくりで満ちており、うらのうらに何が仕組まれているか知れたものではない」⁴⁰⁾との答えであった。その後漸く見出したのが、次の論文であった。黄自身が日本の文学雑誌の「世界俳句特集」に寄せた「台湾の俳句——その周辺ほか」の中でこの件について述べ、「私たちの会では、会の中に政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律とした」⁴¹⁾と明言していた。政治活動と俳句表現とは別ではないかと言う人がいるとしたらそれは詭弁で、政治活動が禁止ならば当然、俳句に表現できるはずはないのである。では俳句には、その種の俳句は皆無なのかという点については、別稿に譲り、ここでは扱わない。張との関わりの部分のみとする。

2. 張継昭と Andy Chang のはざまから生まれくるもの

2-1. 忘れられぬ他者・日本への想いそして二つの中国

ここでは張が、特に日本人を AC 通信などの活動対象としていることと、派生的に繋がる事柄について分析する。

張が初めて政治問題についての評論『台湾丸の沈没?』を日本語で出版したのは2000年であり、ここから「台湾丸」シリーズが始まる。大学の専門も就職先も、政治とは関係のない仕事であったにも拘らず、張が台湾独立運動に関わっていくことになった背景には何かがあるのか。直接の契機になったのは、日本人があまりにも台湾のことを知らない、ということであったと言う。張は1992年の年末に職を辞してから父母の世話を始め、それは99年98歳の父親が亡くなるまで続いた。その間『フライデイ・ランチクラブ』『不幸のカルテ』を発表した。そのあと99年にマイクロソフトのメールマガジンが刊行され、このうちの政治、国際問題などを他の日本人記者たちに誘われ受け持ったことから、これ

が閉鎖になっても「アジア国際通信」を書き、最終的に張の第二の人生は、「台湾の直面する問題を日本の読者に伝える」という目標に定まった。その後独立し、AC通信として台湾問題を取り上げて記事を書き、今日に到っている。以上のEメール⁴²⁾のまとめは、張が台湾独立運動に照準を定めたことを具体的に物語る。更に同メールによると、2000年に台湾では民進党候補の陳水扁が国民党候補を破って始めて台湾人政党的総統が誕生したが、直ちに激烈な国民党の嫌がらせや政治的ボイコットが始まり、政治は難航したので、これら一連の記事をまとめて『台湾丸の沈没?』(2000、中国語版2002)、『ガンバレ台湾丸』(2003、中国語2004)、『連宋の乱の真相』(2004)、『ラファイエット事件⁴³⁾の研究』(2006、日本語で発表と同時に中国語に翻訳)『台湾丸の難航』(2005)『台湾丸の針路』(2010、日本語と中国語の対訳)などを出版することによって、活動の拡充を図ろうとした。

そこで筆者は、張の作品は何故日本語なのか、対象は台湾の人々ではないのかを問うと、「日本人があまりにも台湾情勢について知らないことに驚かされ、日本人に伝えることにした」と言う。台湾情勢に詳しくないのは、日本人のみではないだろう。それではいっそう、日本人を啓発あるいは情宣の対象に定めた理由が理解できない。日本人に情報を与えて理解させることの意義はどこにあるのだろうか。

張の職を辞してからのその後の方向性の決定には、やはり台湾で過した日々の記憶が、特にここでは戦前の日本統治時代の台湾富裕層としての経験が、「忘れられぬ他者」日本を懐古し、脳裏に蘇えてくるのではないだろうか。若林正丈の「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」⁴⁴⁾は、そのことを具体的に説明している。それによれば、「台湾ナショナリズムとは、端的に言えば『台湾独立』の運動と思想、すなわち、台湾において独自の政治共同体、つまりはネーション(nation)が存在している、あるいはネーション形成すべきであり、その共同体には国際社会において固有の名前と主権的地位が与えられるべきである、とする思想と運動である」⁴⁵⁾とし、また「台湾ナショナリズムが、近代の台湾社会にとっての日本と中国という2つの『忘れ得ぬ他者』との関係から形成された」⁴⁶⁾という関係論的視点から言えば、本来ならば、戦前の日本統治期50年間の日本人に対する被植民者の怒りがあるはずだが、前述した台湾人張の良き日々を過した日本統治時代の経験が、無意識に日本人に向けて台湾情勢を説明し、共感を得ようとの志向性を持つと推察できるのではないか。

しかも先に述べたが、第二の人生に入ってからすぐに著したエッセイ風と半自叙伝風小説二冊の主人公の名前がアキラである。その兄弟の名前も全て日本名である。アキラは張自身を描いていると見られる。ここに日本統治時代に対する良き記憶の証左が見て取れるのである。もし嫌な記憶であれば、例え小説であっても、自分に当たる登場人物に、日本名

を付けるはずがない。以前台湾人の日本育ちで川柳に優れた人が創作した、台湾・日本・中国に亘る壮大な舞台設定の日本語長編小説⁴⁷⁾を贈られ読んだが、そういう名前の使われ方はない。また張は、ペンネームを「紅柿」としている。これを台湾語風に発音すると「Ang-Kee-La」つまり張の本名となるとのこと。こういう表現は、日本に関わった富裕層の人々全員ではなく、張自身が個人的に抱く特別な日本統治期の快い経験の結果とも考えられる。筆者は以前、「植民地時代に身体化された日本語は、彼らの自己表現の根幹となつて、日本統治時代の良い思い出と共に、いつまでも精神的身体的に内在するのである」⁴⁸⁾と論じたことがあるが、そのことは、特に張において顕示されていると言えよう。

更に「植民地時代に身体化された日本語」と言うように限定化すると、張の場合は、小学三年までしか日本語は学んでいないので、それには当たらない。しかし長じてから独学で自分のものにしたと言うから、彼の日本に対する格別な思いが、日本語習熟に志向させたのであろう。但し語学について言うならば、張は5カ国語を操る。

あるいはまた、両親が留学滞在し、上三兄弟も留学して帰化し在住する日本は、張にとって一種の憧憬の地であったかもしれない。また現在においてもその思いは継続しているとも考えられる。その台湾歴史変遷の上に立つ個人的な感情がある故にいつそう、日本人には台湾の実情を理解して欲しいとの欲求が、日本人向けのAC通信に講演に、張を駆り立てていくのではないか。しかも退職後の仕事を共にする仲間は日本人が多く、日本人コミュニティとの関わりが、自然と出てくるように見える。本人も無意識的にその方向性を持って、環境をリサーチしていくのではないだろうか。そのことが、張の日本人との良い経験の記憶と重なって、親密感や安心感を与えているのではないか。米国社会での張が置かれたコミュニティの問題は、後述する。

更に若林の前掲書によると、中国には、内戦により中国大陸を追われてきた中華民国と、それを含めて一国統一を図ろうとする中華人民共和国との2つがある。この2つのもたらした経験は、張の記憶の底に持続的に固定化され、折ある毎に意識上に浮上してくると推察される。そしてそれらは、若林の言う「台湾ナショナリズムは、台湾の歴史的・地理的周縁性の産物、あるいはそれへの反発の産物として理解できる」⁴⁹⁾ということと、張が台湾の日本統治期に持った快い経験から一変して、中華民国国民党政府の政策を逃れて渡米帰化することになった経験を経て、ディアスポラとして台湾独立運動に携わることを第二の人生の目標に定めた理由とは、一致するのである。勿論これは張一人の歴史的経験であり、張と同様な経験をした者たちの典型的な一事例でしかない。歴史的には日本と中国から周縁化された台湾在住の台湾人としてではなく、米国留学と帰化という、よりいつそう二重に周縁化させられた、ディアスポラの止むにやまれぬ行動と言えよう。ここで言う

二重の周縁化とは、戦前の日本植民地支配と戦後中華民国政府国民党の植民地的支配であるが、米国に渡ったディアスポラ張らは、アメリカ人社会においてはマイノリティであることからくる、更なる周縁化を経験することになる。

張がミズーリ大学修士・ライス大学地球物理(地震学)博士号を取って就職した米国の地震関係の仕事場には、米国人でも博士号を持っている者がいなかったせいで、嫉妬から嫌がらせを受けたという。先の成瀬の調査にもあるように、米国での専門知識を持つ人材不足による、アジアからの留学生受け入れの体制が整ってきた1960年代においても、その傾向はあった。陳天璽の「台湾系華人移民」⁵⁰⁾で扱っている一般移民についても同様の記述があり、マジョリティからしてみれば、移民の流入により雇用機会が奪われ、異文化の衝突による事件や犯罪の多発など、移民が社会に与える不安要因は多く、彼らにとって厄介な存在なのである。引用すると「その後、第二次世界大戦から80年代頃までの華人移民は、台湾や香港からの者が多数を占め、台湾の人たちは一獲千金というよりも、より高い教育水準や生活の安定を目的にアメリカに渡った。こうした人々は、専門知識を身につけ、修士号や博士号を取得し、医者や技術者などとして職を得て市民権を取得しアメリカに根付く者が多い」⁵¹⁾としているから、当時張も大学を卒業した留学生として、台湾からの多数の移民の一部分を占めていたのである。しかし陳は、「いかに自由で平等な国アメリカであるといっても、『ガラスの天井(the glass ceiling)』にぶち当たる。これは、アメリカ社会におけるマイノリティの昇進状況を表す際に使われる表現であり、つまり昇進への門戸はガラスで出来ており、一見誰でも制限なく平等に昇進できるように見えるが、実はやはり、白人以外の者には限界があるということを意味している」⁵²⁾と指摘する。まさに張に対する職場のいじめは、陳のこの稿が裏付けている。

以上から言えることは、いくら自由の国米国と雖も、戦後1945年直後から張が留学した1960年代においても、更に現在に近い1980年代であっても、移動し流入してきた他者であるディアスポラは、大なり小なりその社会に占めるポジショニングによって、周縁化される要因を、否応なしに内包させられるのである。近年では、出自の国に帰還して、そのディアスポラの特性を発揮して、東西の間を繋ぐ役割を担うことも出来よう。しかし、そうは出来ずに他国で生き抜くことを余儀なくされた者達は、真のイグザイルでありディアスポラなのである。特に台湾からの留学生を含む移住者は、二度とこの地を踏むことがないと決意しての出奔であったと見られる。

2- 2. 張におけるディアスポラコミュニティ

張のアメリカ留学後の足取りを追ってみよう。大学院を終えて就職したのはワシントン

ンであったが、西海岸のサンクレメンテに引っ越した。引退前はヴァージニア(ワシントン郊外)に住んでいたが、ワシントンから台北まで飛行機を二回乗り換えて、22時間かかる。出来れば西海岸に引っ越したいと思っていて、ようやく引越したのが2003年春であった。

そのコミュニティについての歴史的地理的説明は、張のEメール⁵³⁾に詳しいが、紙幅の都合により割愛する。引っ越して間もなく、ロスの台湾人(米国籍台湾人のこと)から連絡があって、「台美人論壇」というグループに、『台湾丸の沈没?』について講演を頼まれた。それ以後「台美人論壇」のメンバーになったが、サンクレメンテはロスよりもサンディエゴの方が近いので、サンディエゴの同郷会に参加する方が多かったという。そのサンディエゴの同郷会月刊誌に、毎月中国語の記事を連載し、ロスの同郷会で講演をし、台湾問題の討論会などに参加するようになった。2007年頃からロス在住の日本人に講演を依頼されるようになり、やがて日本人と台湾人数人が「緑の会」を結成して、張がロスの日本人に対して台湾問題の講演を行うようになった。2006年7月には、シンシナティで行われた在米台湾人教授会において、「ラファイエット事件の真相」(中国語版2006年6月)を台湾語で講演しているが、それについては触れない。ここでは、海外のディアスポラコミュニティが如何に存在し、そのコミュニティが、台湾独立運動をする張と如何なるつながりを持っているかを辿る。

『台湾丸の沈没?』の「台湾人民独立宣言」の後半にあるように、この宣言は発表場所を世界の大新聞、NYタイムズ、ワシントンポストなど、日本の産経、朝日、読売なども例に挙げているが、実際はNYタイムズの2010年7月10日に、「台湾人民建国宣言」として広告欄に掲載された。『「独立ではない、建国だ」と言うことが大切である。サンフランシスコ平和条約によって台湾の地位は未定となり、台湾人は国籍をなくした。だから、台湾人は中華民国から独立するのではなく建国するのである。これは重要なことで、この違いを理解していないから台湾人は団結できないのである』⁵⁴⁾という具合に、『台湾丸の沈没?』の「台湾人民独立宣言」から4ヶ月(計画から6ヶ月)経って、ニューヨークタイムズに掲載する前日のAC通信324号に、「建国宣言」と改名する意義を鮮明にしている。掲載までの紆余曲折の詳細についても、同じ号に述べられているが、台湾人が如何に思想的に混乱し、建国に団結尽力するのがどんなに難しいかを表わしているとしている。

そして、張の関わるアメリカ西海岸のコミュニティでは、賛成してこの宣言に参加する者も多いが、多様な独立意識と各々の出自の背景を背負いつつ、その方法選択の差異によって、意見統一が困難である。それは、台湾内部での台湾独立の意識統一の困難性の上に、ディアスポラ意識の多様性をも包含して、よりいっそうの複雑性・混迷性を表出する。

例えば張は政党に属さず、台湾で活動していないし、表に出ることもしないと自分のことを評しているためか、サンディエゴの同郷会の月間雑誌に記事を書くと、その内容によってその都度、国民党と民進党いずれからも攻撃・批判を受ける羽目になる。個人的な批判で居辛くなり、主にロスの「南加州台湾会」に行くようになる。その「南加州台湾会」は、張の働きかけで一時は80人ほどになったが、もともと台湾人のグループがもとになり、派閥意識が強く団結しないので、これらの諸団体の代表が集まって合作するような討論会を作った。しかしニューヨークタイムズに独立宣言を発表したことで、たちまち12～14人ほどになった。張がニューヨークタイムズに独立宣言を発表したことは、『南加州台湾会』の会議で意見を提出して、12人が賛成して始めたのだが、途中で邪魔が入って計画が頓挫し、最終的には張一人で宣言を書き、台湾で諸団体の同意も募金も全て張が一人でやったとのこと。すると発表後すぐに、張の売名行為だと批判する人が出てくるという具合に、なかなか一枚岩に団結できないと言う⁵⁵⁾。以上は張の主張であるから、その裏づけはない。ただ、張の立場から活動の困難性についてまとめたものである。

更にその他の例として、張の仲間の一人に送りつけられた日本人からの誹謗メールの件がある。最も台湾情勢を理解して欲しい日本人の批判であるから、打撃であったろう。必死に衆智を結集したと自負したい張にとっては、尚更であろう。しかし、この活動が何らかの圧力によって、頓挫もしくは無いものになり、気泡と化す危惧を持ちつつ進めている⁵⁶⁾のであれば、このことによって仲違いとなって「南加州緑の会」が解散になっても、その独立活動を停止しようとはしなかった。このように張は、いくつかの台湾と関わるコミュニティに参加しつつ、自己主張の拡大に努める⁵⁷⁾。2009年12月1日には、「日本李登輝友の会ロサンゼルス支部」主催の映画「台湾人生」上映会⁵⁸⁾で、アンディチャン博士の補足説明と質疑応答という役割を担っている。この映画は、5人の台湾人にインタビューする形で、ドキュメンタリーとして日本人監督によって制作されたものである。これによっても南加州の諸コミュニティの活動とアンディチャンとのつながりの一端が垣間見えるのである。日本と台湾両方のマスコミに宣伝を依頼しての観客980人で、そのうち戦前生まれが30%で、台湾生まれ20%の中で、日台共栄のために開催している。その質疑応答には、台湾の歴史の上に立っての現状と将来への展望が、観客との間に交わされている。例えば、日本人からの差別、当時の若者の日本人としての愛国心、自分達を捨てた日本政府への恨み、台湾の元日本人を忘れないでというだけでなく独立を助けてほしい等、30ほどの質問応答をしている⁵⁹⁾。但し、このような会に参加をしても張は、李登輝は台湾独立に力を尽くさなかったとの見解を持つ。

また陳天璽の「台湾系華人移民」に戻ると、陳の論の目的は、台湾系の華人移民の活

動やアイデンティティに注目したものであるが、張の関わるコミュニティが如何なるものか、比較対象の一例としてみてみよう。台湾独立運動が、陳の取り上げているコミュニティでどのように進んでいるかは分からないが、どういう機能を持っているかをみると、「サブ・ナショナルな外交使節」的役割を持っているとする。この例の、「百人会 (The committee of 100)」とは、1990年に結成された非政府組織で、米国と中国、そして台湾の相互理解を構築するために、使節派遣による政府訪問をはじめ、各政府の高官を招き、交流の場を設け、個人的な人脈を活用するなど、あらゆる機会を利用し、政府及び華人等が互いに抱えている問題を解決するため、対話を続けていくよう橋渡しをしているとする。その具体例の中で、1996年3月中国のミサイル演習により台湾海峡危機が発生した時も、中国と台湾療法に親戚・友人を持つメンバーからの要請で「百人会」の総会を開き、アメリカ上院議員や高官に働きかけて、江沢民とクリントン両首脳への訪問を実現させて、その状況の好転を図った功績の一部は、このコミュニティの力であるとする。このような力を持つためには、経済力も権力もかなりのレベルを要するのであるが、先に述べたこれからの三世世代の若者は、ビジネスにおいて同じく、東西の架け橋になろうとしているという。つまり「はざま」としての役割と生きがいをもつことが、これからの方向付けとなるという。

実は張もまた、アンディチャンとのはざまに揺れ動きながら、中国を見据えつつ、台湾のために自分自身が奔走しようとしているのではないか。台湾人民を鼓舞し、叱咤激励するのではなく、張自身に出来ることを実行することによって、台湾との架け橋の役割を担おうとしているように思われる。二つの名前と国とのはざまに生きる者の使命でもあるかのように。そのことを次に述べる。

3. 張にとっての台湾独立運動とその周辺

3-1. 海外における台湾独立運動

ここでは、張の台湾独立運動の歴史の上で、特に戦後から今日に至るまでの部分について、しかも張と関わる範囲で考察する。そこには、台湾独立運動に携わる台湾在住の人々とは異なる思考・方法・行動があるのではないかとの仮説に立っている。結論から言うと、ディアスポラ張の台湾独立運動についての考え方は、台湾在住の独立運動家とは異なること筆者は推察する。

張は「中国から亡命した有名な作家が、台湾の政治家や論客は凡庸で物事を学ぶ事ができないと何度でも述べているが、全くその通りである。あまり言いたくない事だが、台湾の独立運動を名乗る人々の多くは体制内運動といって、政府を倒すとは言わないで中華

民国を改名するという。つまりキレイごとをいう、本物でない運動家ではないかという疑問が湧く」⁶⁰⁾と非難するのである。しかし台湾在住の活動家と言われる人々は、台湾に在住しているが故に、政治情勢と民心の動きを直に感受することができる。従って台湾人民の現状と乖離した活動は困難であると判断するのであろうか。台湾の歴史と時機とに動揺する社会情勢との対応で、適時動向を精査し、肌身に感じて方向性を探らざるを得ない彼らの実情があると思われる。それは、「台北俳句会」が独自の不文律を掲げて、自己存続を図ろうとすることを共有すると筆者は考察する。海外の地から呼びかける張とは、立ち位置が異なるのである。それが故に張は、目前のことに惑わされない客観的な判断が可能であり、大局的な動向判断が可能であるかもしれない。その差異でなくとも、「独立系の指導者は必ずしも一枚岩ではなく、個人の思惑が強すぎて一貫しないまま、一代で終わってしまったのがその傾向である」と楊文魁⁶¹⁾が述べるように、台湾独立運動を唱える者の数ほど多様性を持っていると言われる。だからこそ、なかなか一枚岩になれないと、独立活動家の幾人かは嘆く。張もその中の一人と言えるかもしれない。否、嘆くというより苦悩しつつ、常に現状を打破しようとの意気込みを維持し続けている。しかも張はただ一人、どこの台湾独立運動の団体にも属さず、独自の主張を展開する。

そこであらかじめ、戦後の外国からの台湾独立運動の歴史を、「台湾独立運動関連年表」(1945-2002年)⁶²⁾を基に、伊藤潔⁶³⁾、林景明⁶⁴⁾、楊文魁らの他稿で補足しながら概略を述べて行こう。

張が10歳の時終戦を迎える。1947年2.28事件後、国民党政府の弾圧に抵抗する知識人たちは海外逃亡する者も多かった。中でも伊藤潔の前掲書の論によると、次のようになる。2・28事件で逮捕を逃れ、香港で「台湾再解放運動聯盟」を結成した廖文毅が、1948年9月に国際連合に「台湾の信託統治」を請願した。またその後廖は、1956年に東京で「台湾共和国臨時政府」を樹立し、自ら「臨時大統領」に就任した。しかし臨時政府の資金難から、1965年に国民党政権に屈して台湾に帰国したため、臨時政府はなし崩しに消滅した。そのために日台湾独立運動は、戦後に来日した留学生らが、1960年に結成した「台湾青年社」(後に「台湾青年会」)に中心が移る。台湾成年者の指導者だった王育徳教授は多くの青年層の弟子達を残して、日本で客死した。一方台湾では、海外に留学する者が増大し、特に米国への台湾人留学生が急増し、米国各地で台湾独立関係の組織が相次いで結成された。その主なものの一つが1956年結成の3F(The Committees for Formosans Free Formosa-台湾人のための自由台湾委員会)で、後1958年UFI(The United Formosans for Independence)に改組された。在米の台湾人は台湾の大学を卒業してから留学した者が殆どで、所得が高く、組織的な活動を通じて、米国政府や議会に対して、台湾独立のための

効果的の工作と説得を展開している。以上、伊藤のこの説は、前述の成瀬や陳の説のそれを共有している。このような事情から、台湾独立運動の中心は日本から米国に移り、1970年1月にニューヨークに総本部「台湾独立聯盟」(後に「台湾独立建国聯盟」)を発足させ、ロサンゼルスに米国本部、東京に日本本部、パリにヨーロッパ本部、サンパウロに南米本部、台北には秘密の台湾本部が置かれて、世界的な組織に発展した。

張は台湾人留学生の例に漏れず、台湾の大学を卒業した後、帰化を覚悟で米国に留学した。張のその当時の話から、台湾独立のための留学生の組織の話は出ていないから、ニューヨークやロサンゼルス等の組織についての情報は、共有していなかったとみられる。ということは、台湾人の全米的組織までには達していなかったと言えよう。また張が当時それほど台湾独立に関わるほどの意欲も持てない多忙な時期であったかもしれない。

しかし台湾人の海外への移民や留学が盛んになるにつれて、移動した先の国々で、特に台湾人移入の多い米国では、彼らを作るコミュニティの規模が大きくなればなるほど、出自の土地についての思いはいや増しに増すと思われる。しかし、2002年6月5日台湾独立建国聯盟(World United Formosans For Independence)機関紙・月間『台湾青年』(日文版、台独聯盟に日本本部発行、1960年4月創刊)は、理論機関紙としての役割は一応達成したとして、第500号をもって停刊された。台湾独立の理論的バックボーンとなっていたこの雑誌が停刊になった背景には、種々の歴史的経緯が考えられるが、ここでは触れない。

そして現在の台湾独立運動は、理論と活動ともに盛んだった2000年前後に比較して、新聞・雑誌はもとより、学術論文も数少なくなり、管見の限りでは、殆んどそれらしきものはない。陳光興の「台湾独立運動の終わり—2000年台湾総統選挙後の新情勢—」⁶⁵⁾の中で論じていることを概略をまとめてみると、次のようになる。今回の選挙(民進党の陳水扁が勝利したもの)は歴史的一戦であっただけでなく、かつてないほどの派手で刺激的な選挙であった。民進党の勝利はポスト冷戦の流れに置ける一つのキーポイントである。「冷戦時代の終結」は、「グローバル化」が一義的な客観的状况たる前提条件であるということがはっきり見て取れるし、グローバル化のあらたな構造が指摘・暗示するのは合衆国の国家機構・資本が既に平穏にグローバルな覇権を握る位置を占めているということである。しかし、この陳水扁の登場は、台湾社会が依然としてある種の空白期間であるという感じの中に置かれている。多くの新現象が分析不可能と言う「失語症」状況が生み出されている。この殆どは快適ともいえる新情勢をより具体的に捕らえるには、より新しい考えと言語が必要なのではなかろうかと疑問符をつける。しかしまた、どこまでも反対派である陳らにしてみれば、あたかも新しい情勢の下で発言できる領域が広がり、新政権を

批判することの正当性がなくなってしまったかのようであると、選挙直後のあとがきに記している。その後の台湾情勢の変移を予測してのことであろうか、それとも単なる狼狽であろうか。民進党が政権を執ったら、それで運動は完結したのだろうかという疑問符は、台湾の現状を暗示するかのようでもある。確かに現在はまた、国民党に政権が移っている。

台湾の民心は二分して揺れている。独立運動とは、台湾の場合は完了するものなのであろうか。そういう中、未だに継続中の AC 通信は、例え張側の意見であろうとも、いかにも貴重な情報源として、台湾情勢を知ることの可能な資料的存在である。しかも、グローバルに人々が世界を移動し行き交う今日、しかも各国に自治独立の火種を抱え、殊に現在では「アラブの春」の人民自治独立の攻勢盛んな折から、この AC 通信の果す役割は大きいかもしれない。なぜならば、張の繰り広げる台湾情勢についての主張は、以前から台湾のみにとどまらず、グローバルな視野から説いてくるからである。例えば劉曉波のノーベル賞受賞について、中国は諸国に授賞式に不参加を要請したことは、AC 通信 No. 339 (2010.12.13 配信) に、アメリカは東南アジアの未解決領土について中国に譲歩する事はないと言明したことは、同じく No. 335 (2010.11.4 配信) に、アラブの春は同じく No. 379 (2011.12.31 配信) など、話題は多岐に亘りその時機に触れて、読者の心底に響かせる戦略である。そのことは、現在の世界情勢に即応し、共感を呼ぶ大きな要因の一つとなっているであろう。

3-2. 張の台湾独立運動理論

ここで張の理論については、既に 2-2 において、『台湾丸の沈没?』を基に述べているが、他の理論と比較しつつ概略を述べる。ここでは張が NY タイムズに掲載した台湾人民建國宣言(資料Ⅱ-2 参照)を基にする。

1951年9月に、日本のサンフランシスコ平和条約によって台湾及び澎湖群島は未確定領土となり、同時に台湾人民も無国籍となった。台湾及び澎湖群島の主権は当時 600 万の台湾人民及びその子孫に属する。台湾人は中国人ではない。中華民国は蒋介石が台湾に持ち込んだ亡命政府の集団で、多くの国は既に滅亡した国と認めている。中華人民共和国(中国)は台湾と澎湖群島が中国領土であると声明した⁶⁶⁾が、これは事実ではなく、国際法的根拠がない。従って台湾人民の所有する「台湾」という独立国家を建設し、世界に宣言するということである。

台湾独立の法的根拠について、張は戦後サンフランシスコ平和条約を締結した時点で独立しているとするのに対して、小田滋は「主権独立国家の『台湾』—『台湾』の国際法上の地位—(私の体験的・自伝的台湾論)」⁶⁷⁾の中で、国連脱退の時点としている。この

論に従って簡略に述べると、小田は次のように言う。国連は1971年10月の総会決議で、国連に議席をもつチャイナは「中華人民共和国・共産党政権」がその代表であると指定し、「中華民國・国民党政権」を放逐する決定をした。従って中国大陆にやがては帰ろうとして台湾に逃亡していたチャイナの一派は、ここでその存在を否定されたから、もともと台湾人の住む島は台湾人のものとするとしている。独立の時点は異なるが、張も小田も法的根拠によって独立すべきとする。

一方陳鵬仁の「台湾独立論への疑問」⁶⁸⁾では、同じく国際法上において、台湾は歴史的経緯から、中華民國に返還されるべきものとする。サンフランシスコ対日平和条約第二条B項で、日本が台湾を放棄するに際して、「どの国のために」放棄するか明記せず、新旧政府の承認をめぐる連合国の意見が一致せず、台湾をいずれに返還するか決定を見なかったからであるとする。しかし、1943年の米・英大統領と蒋介石総統が、日本に対して発したカイロ宣言で、「これら同盟国の目的は、満州・台湾・澎湖群島のような日本国が清国人より盗取した一切の地域を中華民國に返還することにある」としている。この宣言と、1954年の米華相互防衛条約第六条でも、同じくそれを認めているから、それらの史実を重視されなくてはならないとする。また、台湾人はもともと中国人であり、台湾人の台湾は実現しにくく、将来的に中共が台湾を「解放」したいと強いることを忘れてはならないとする。また、新井雄雄の「講座・中国問題入門＝根拠なき“台湾独立論”」(上)⁶⁹⁾(下)⁷⁰⁾によると、日中国交回復推進の視点に立ち、台湾人は中国とは別の独立した民族だと言うものに対して、大陸とは同根一体であると歴史的に説明し、アメリカの勝手な大統領の言明や、第七艦隊を台湾へ派遣したことなどを中国領土への武力侵略として、独立論に反対する。

張や小田の台湾独立論の国際法的根拠に対して、陳が誰に返還するのかという点をついたのは、当然の問題提起ではないかと筆者は考える。カイロ宣言の妥当性の有無を問わずに考察するならば、陳の主張は肯定できる。しかし、どの論者にも見られるように、歴史的経緯から見れば、過去の歴史的事実も相互間の約定も、如何なる国であろうとも国益のためには、簡単にそれを反故にして態度を一変するということである。史実がどうであれ、現実在即して豹変するのが現実の外交のようである。従ってこれら独立論も反独立論も、国際的歴史の流れによって複雑化・多様化・混迷化すると思われる。陳がこの論を発表したのは、まだ戒厳令の解かれぬ時期の、台湾から日本に留学していた学生らが、日本において王育徳を代表に台湾青年社を結成し、『台湾青年』を創刊した1960年の3年後である。台湾本島では困難な台湾ナショナリズムが台頭し始めた情勢の中で、書かれたものである。陳も恐らくその運動に誘われた一人として、その運動に疑問をもって論じたの

であろう。新井のこの論が1・2月に掲載された1972年の10月には、田中首相の訪中が行われたという、台湾を取り巻く国際情勢の歴史を反映しているのである。

以上台湾独立論について、張のそれを他稿の一部と比較しつつ概略を述べた。概略を述べる理由は、冒頭に述べたとおりに、張のディアスポラとしての活動に重点を置くためである。

ここで張の台湾独立運動に戻る。過去の歴史を辿っても分かるように、台湾情勢は一筋縄では行かない。中国・日本の過去からの歴史を背負う他者との絡み合いに加えて、特に国民党政府がアメリカの政策変更の傘下で、中国との関係を現状維持に押さえ込まれている状況では、民進党を支持する張の台湾独立運動は、なかなか容易ではない。張自身も総体的には、アメリカ政府を強力な支援国との見方は崩さないから、アメリカのその力をいかに有効に利用できるか、かなり苦慮するところであろう。現状では張は、資料Ⅲのように、元国務長官のイエーツ氏へ請願した。今後台湾・日本・シンガポールなど東南アジアまで、署名運動を展開し、それをアメリカ政府へ提出する予定等の方法論が確認される。

3-3. ディアスポラの知識人と独立のための方法論

ここでは、張以外の台湾独立運動家について、その歴史とともに辿り、その共有する部分を確認する。ここまで張が、ディアスポラの知識人であることを仮説として論じてきた。

では台湾の独立運動に関わってのディアスポラについて述べるならば、ディアスポラと言われる人々は、張の言うように、そして成瀬の前掲稿が証明する如く、国民党政府の弾圧から逃れるために他国に渡り、特に戦後の米国に移動する移民となり、帰化を覚悟の上で留学する等、出自の土地を離れていく背景に、その地に存在できない何らかの原因を抱えている者が多かった。その理由とは、その地にあっては周縁化せざるを得ないか或いはまた、心身の拘束に遇う危惧があったということであり、活路を見出すための移動であった。特に戦後から今日に至るまでの米国への移動は、他国へのそれより格段に多い。その理由は、先に述べた。

ところで張は、台北俳句会の会員としてディアスポラであることは、希少な存在であるが、台湾独立運動としての視座から見れば、多くの活動家の一部であることが、次第に明らかになってきた。現在でこそ台湾問題は、日本のマスコミにはなかなか登場しにくくなっている。それは中国に対する米国・日本の政治的向き合い方に従って、台湾への政治的態勢が変動することと関わってくるのだが、それについては他稿に譲る。ここではディアスポラである活動家について、2～3列挙し、それらから表出されるものを総括する。

先ず前掲書の林景明は、1947年の2・28戦争に敗れて海外に亡命した台湾人たちの中の一人として、自己の台湾独立運動にかけた12年間の歴史の変遷を、憤りとともに述べる。それは、台湾を追い出した国民党政府に留まらず、亡命者を受け入れる海外各国に対してであった。彼の前掲書からその部分をまとめると、次のようになる。台湾では言論の自由が許されなかった人々は、自由主義国家が台湾独立を支援しているからこそ、活動宣伝が許されると取り違える者が多かった。その一人が林自身であった。1962年3月、林が日本に来てみると、独立運動は国際的支援を受けているどころか、むしろ弾圧を受けていることが分かった。米国は活動家の留学生にとって好意的に見えていたが、ニクソンの訪中、国連追放、田中角栄の訪中と続いて、蒋介石政権が大打撃を受けて動揺した1972年に、台湾では起こるべき事が起こらなかった。ニクソンが台湾を中国との取引材料にしても、台湾人はどうすることも出来なかった。ここにおいて、景明は日本政府・日本人民が、人為的に台湾独立運動を弾圧・妨害したことに対し、満腔の怒りを込めて、抗議せずにはいられないとし、更に顕著な一例として、政治犯不引渡しの国際慣習を無視した1968年の柳文卿強制送還を挙げ、景明自身についても日本に来て12年間、絶えず追い回され、強制収容されたり、未だに強制送還の脅威から解放されていないばかりでなく、独立運動家に対する弾圧が独立運動全体の士気に影響を及ぼすことを懸念している。そして進歩的知識人を自任する日本人が、かえって「より大きい国益のために台湾を中国のものとして認めよ」と建築して、台湾人の自決権を踏みにじり、「これは中国の固有領土である台湾の現状復帰だ」とうそおいているのに、我慢ならないと言う。これは、1973年の特別寄稿であるから、この後の世界の、否米国と日本の台湾への対応態度がいかに変化するかは、次の活動家の事例に述べられる。

独立運動にかけた台湾人学者で当時東京理科大学教授の周英明がその夫人金美齡とその娘の三人とで40年ぶりに帰国するのに、同行取材した上島嘉郎の記事⁷¹⁾に、台湾の変化が詳述される。この夫妻は初の台湾人李登輝政権が誕生するまでは、台湾政府(国民党)にとって危険な「政治犯」だった。それが2000年3月生粋の台湾人陳水扁へ政権が引き継がれたことによって、台湾政府の方針が改進黨、今回の帰国となった。この学者の帰国を「浦島太郎が帰ってきた」と台湾の新聞「自由時報」は伝えた。ノーベル化学賞受賞者李遠哲が米国から1994年に帰国し、台湾中央研究院院長に就任後、陳水扁を支持すると表明して、民進黨躍進に一役買ったという事件を、陳光興がその前掲書にも挙げているが、次の許・廬夫妻の事例と同様、台湾独立運動にかけた学者らが、危惧なく台湾に入ることのできる時代が到来したというのである。この周・金夫妻帰国時には、李登輝・現台湾独立建国聯盟主席の黃昭堂や蔡焜燦などと歓談し、台湾の変化を実感して帰っている。

許世楷・廬千恵夫妻に対するインタビュー記事⁷²⁾によると、許世楷は日本留学時代の1960年2月に、当時明治大学の講師であった王育徳を中心にした編集会議によって『台湾青年』を創刊し、蒋介石政権を批判し始めた。この編集長は、「台湾独立建国聯盟の主席までつとめた筋金入りの独立派リーダーを、駐日代表に任命した陳水扁総統の決断には驚きました。」と、民進党政権になっても、米国・日本政府の意向を受けた質問を導入の言葉とする。しかし「主人は33年間、私は36年間、台湾に帰国できませんでした。」と言う夫妻に、台湾情勢の変化を聞きとり詳述している。そして廬の「日本人から、台湾がすごく親日的であるとか言われるのは、蔡焜燦・許文龍たち年代の影響を受けた若い世代のハーリーズーが迎えるのだ。私たちにノービザになった御礼を言われるが、台湾人は日本人が自分達を他の国の人と同じように扱ってくれたのが嬉しいのだ」という言葉で締めくくっている。

以上の事例はごく一部の活動家であるが、それらの多くは日本を拠点に活動し、あるいは日本を経由して米国等他国で活動するなど、多かれ少なかれ日本を信頼できる国としているのである。それは戦前の統治国日本への良い経験と記憶によるものであることは、彼らが富裕層で日本への留学が可能な人々であったことと、2・28事件とそれに関わる国民党政権の弾圧の影響を受けた経験と記憶を共有しているのである。そうした経験と記憶は張と共通しており、一時的であっても海外に在住しながら活動したという立ち位置も、今の張と変りはない。張は、過去の多くのディアスポラ活動家のひとりであること、しかも現在なお、張の活動は沸々と血を滾らせて、世界情勢と睨み合いつつ、日本に世界へ、台湾情報を送り続けるのである。勿論台湾を拠点に独立活動を続けた活動家は多いが、本稿では、ディアスポラの観点からのみに限定する。しかし、多くの日本に住むディアスポラの活動家の日本に対する怨恨は、1972年の日中国交締結やその前後からの米・日の裏切り行為と彼らが受けとめる事件により、活動家のみならず台湾人まで浸透していったことは否めない。そのことは、彼らの言動の端々に、共通して表出されているのである。

ところで「台北俳句会」は張にとって、如何なる存在であろうか。先述の通り、「台北俳句会」では、政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律としている。そうであるならば、張にとって何のメリットがあるのか。先述の繰り返しになるが、つまり彼自身の文学的素養のなせるところというだけでなく、日本語の俳句表現は植民地統治国日本の快い経験と記憶を持続させるため、あるいは張自身の日本との良好な関係を維持させるための貴重なツールと言えるのではないか。そのことは逆に、「台北俳句会」を主体とするならば、「台北俳句会」の創立以来変節のない、政治には関わらないという「不文律」を証明する貴重な存在と言えよう。張の「台北俳句会」での存在は、勿論他の会員と同様に

政治性の全くない俳句を詠む人であり、台湾独立運動に情熱を傾ける人としては、殆んど知られてはいない。張自身も、自身がディアスポラであるが故に、独立活動ができるとの認識があり、「台北俳句会」会員には、自己の主張を強要はしない。「台北俳句会」が未だに堅持している台湾歴史の根底に流れるものへの不安を、彼なりにしっかり受容しているからであろう。

本稿を執筆中に、台湾総選挙運動と投票、そしてその結果が出た。国民党馬英九が民進黨蔡英文を破って当選したのである。馬英九は二期目に入るが、その勝因は中国大陆との経済的連携つまり中国との交易による経済発展の業績を評価されてのことであるとNHKのニュース解説は論評する。それに対して蔡英文は、そのための経済貧富の格差が顕著になることを、そして経済のみならず一つの中国に統一されていく危惧をアピールしていたのだった。経済は政治と連動することは周知のことであるから、民進黨を支援する側の台湾人にとっては、痛い敗北であろう。しかし以前の選挙戦とは異なり、民進黨が台湾独立を旗印にしていないことは、近年の傾向であろう。かつて1989年には「独立運動高まり緊迫増す台湾」と書かれ⁷³⁾、若林正文が2004年4月に書いた「96年以後—総統選がつくってきた台湾独立世論」⁷⁴⁾には、2004年の総統選は台湾独立を目指す陳水扁支持に集約されるのではないかと論じていた。その時期には台湾独立論は有効な旗印であったが、2012年1月の総統選で馬英九の続投が確定した時点において、台湾独立では現状維持を良しとする米国と日本を始め、大方の台湾の民心を惹きつけることは困難と見て取っているのだろうか。この結果の兆しは、2007年2月に「台湾に蔓延する独立疲れ」というタイトルで、独立を明確に支持する人は20パーセントまでで、現状維持の支持者は過去30パーセントから60パーセントに増加して、対立を煽る政治家への嫌悪感を強めているとの記事⁷⁵⁾にも認められた。

このとき張はシンガポールで正月を過ぎ、その足で2012年1月7日に台湾入りして、台湾総選挙の動向を見守っていた。その間結果を予想してか、AC通信の№380(2012.1.10配信)で、蔡英文が敗北した後の心構えを説き、蔡英文が落選すれば民衆はどう反応するだろうか、負けても失望してはならない、負けてこそ国民党のイカサマ選挙で台湾建国を推進することは不可能と悟る絶好のチャンスである、負けたときこそ本気で中華民国を倒して独立を推進する時であるとする。同じく№381(2012.1.13配信)では、投票直前に台湾入りした米国のダグラス・パール、アメリカの元AIT代表が台湾の総統選挙に非公式介入をする発言をしたとして、怒りを露わにしている。その発言とは、2ヶ月前にアメリカの国務庁副長官のカート・キャンベル博士が、「アメリカは台湾の選挙に対し中立を守り、国民党と民進黨のどちらの候補者が当選してもアメリカは当選者を支持する」と公式声明

を発表しているにも拘らず、この声明に反し、ダグラス・パールは12日夜、台湾の中天テレビに出演して「馬英九が当選すれば台湾、中国とアメリカは安堵するだろう。馬英九の当選は台湾の繁栄と現状に繋がる」と発言したのである。パールはすでに引退した人間だから、彼個人の発言とも言えるが、彼は個人の発言であると言わず、しかも「蔡英文氏が当選すればワシントンは安心できない」とさえ述べたというのである。現状維持は、米国にとっても経済のみならず政治的にも必要不可欠な状態であることを言明させているのである。

今回の台湾を二分する総選挙で、民進党は敗北したが、2000年の勝利の時は、これで独立運動は終了かと陳光興をして言わしめた時期もあった。台湾のみならず世界は常に変動している。それは陳水扁政権の二期目に当たる2006年4月、張が台湾から帰国した時、「台湾から戻ってきて、大いに困惑、失望している。国が潰れそうなのに人民には危機感がない、八方塞がりて解決の道が見つからない。官と民、野党と与党、みんなが拝金主義になり、憂国の情はない。経済の悪化、南北の離反、不正を糾すべき司法警察が堂堂と不法行為をしている。人民はやる気がない」⁷⁶⁾と嘆いた台湾情勢が、馬英九政権二期目の選挙結果を誘致する温床となり、経済優先の今回の結果に繋がったことを、張自身が最も悔やんでいるのではなかろうか。

おわりに

ディアスポラである台湾独立運動の活動家張は、戦後の台湾歴史、それは日本近代史の一部でもあろうが、その中に幾人も存在し、ある者は挫折し、ある者は台湾の体制の中に融合し帰国していった。台湾に在住の気骨ある活動家も、断筆宣言⁷⁷⁾をして、活動を離れていった。その中で張は今もなお、前述の独自の方策によって、独立運動を継続している。張のこれまでの方策が、今後の独立活動に如何に生かされるか注視されるところであるが、建国宣言起草の段階で、また2年前にも別の台湾の有名な政治活動家に、その宣言に署名することを断られたこともある。この宣言はディアスポラの人々ではなく、独立する主権を持つ台湾人が、外国に向かって為すべき⁷⁸⁾だからと、台湾に住むこれら活動家を優先的に位置づけようとの張なりの配慮であった。だがこの結果となり、まさに祖国のための祖国に向けての活動は、苛立たしい緊張感を張に強いる。ディアスポラの知識人の宿命であるかのようである。但しこの有名な活動家のひとり、その後台湾での張の講演会で、彼への賛同と激励を表明して見せたのである。張は彼の意図を如何に捉え、次の活動に繋いでいくか興味のあるところである。

張自身も言うように台湾に居住する者達は、過去の歴史の怖さを記憶に留めているの

で、「台北俳句会」の会員などへの筆者の質問は配慮が必要だとし、海外在住の自分はその恐怖はないとする。その差異の認識は、台湾在住の彼の言うエリートたちへの思いやりでもあり、或いはまた苛立ちとも受けとめられる。だからこそ張は、無意識にその架け橋になるべく活動を継続しているのではないか。それは冒頭部で述べたバンドの定義する知識人としての張が、自分の信ずる真実と正義に従い、弱い台湾在住の人々の側に立って、常に進んでいる姿と言えよう。それはサイドの言う、中間的などつつかずの立場を常に感じながら生きることを余儀なくされている者であり、こうした苛立たしい中間的存在であるということの証左であろう。そのことが、張のディアスポラの立ち位置を感受させるのである。張はその中間的存在であることを逆手にとって、その運動を継続させ、大統領や国会議員にも働きかける。今後は広域に渡って署名運動をも展開しようとする。東日本大震災がなかったら、昨年夏から日本を初署名運動の地として、東・東南アジアに向けて活動を始めようとしていた。この震災で急遽取りやめ、張の講演会と募金運動に変更している。

さらにこれら張の活動が、日本人に日本語でなされることの根底には、忘れ得ぬ日本の戦前の良い経験と記憶へと向かう志向性があり、「台北俳句会」会員としての表現活動は、その良き記憶と関係を現在もお、持続させるためのツールであると言える。同時に、忘れ得ぬ2つの中国に対する逆の想いがあり、それが台湾人への熱烈な思いとなって、活動の原動力の一つとなっているのであろう。

そこで、張の活動の未来性を推察する上での資料として、次のことを述べておこう。張のAC通信を受信する相手は日本人或いは台湾人だけではないということである。確かにAC通信はそれらの人に対して、張側からの台湾問題の情報を提供するためのものである。そのため日台の個人のみでなく、テレビや新聞などのマスコミ関係者からも、通信に対する批評や感想が返信されてくる⁷⁹⁾。更に台湾建国宣言を新聞で読んだカナダの国際司法裁判官からメール⁸⁰⁾で、張の台湾人民建國宣言によって、台湾は法的に台湾国になったと激励され、感奮させられたこともある。そしてその建国宣言は、他の賛同する張とは別の台湾人の出資で、ロスの「太平洋時報」や「台湾日報」⁸¹⁾へと、転載されて行ったのである。張は既存の有名な活動家ではない。しかし、確実にその活動は、関係する人々に影響を与えている。張の活動の過程には、常に困難がつきまとうが、同胞を募り支援者を支えに、その活動を継続する。政治には関われない「台北俳句会」の会員として、一方ディアスポラの台湾独立運動家として、相反する二足の草鞋を履きながら、張はなおも台湾の未来性にかけて行動するのである。時として孤立感に耐えながら。

台湾の未来性は不透明である。台湾独立活動家たちの過去の歴史には、忘れ得ぬ他者

日本と2つの中国の経験と記憶がある。戦後の国民党政権の教育を受けて育った若者世代⁸²⁾と経済優先の人々が、いかにそれらを払拭し、台湾を一つの中国へと先導していくのか、世界の関心が注がれている。更にまた、それに対峙するディアスポラ張の希求する台湾は、いつ実現するのであろうか。そして今回は、張の経験と立ち位置から論じたものであるが、今後は相対立する側から、論が展開される必要があることは言うまでもないであろう。

注

- 1) 近代台湾の歴史特に、戦後日本統治終了以降のものに限定する。
- 2) 「私たちの会では会の中に政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律とした」と主宰黄霊芝が、「台湾の俳句——その周辺ほか」『國文学』2005年9月号 学燈社 91頁に記述している。
- 3) 台北市内の街頭でヤミ煙草を売っていた寡婦が、取締官に殴打されたことをきっかけに、外省人政府に対する憤懣を持つ本省人達が敵対し、全台北市内が暴動状態となり、まだ中国本土にいた蒋介石から送られた軍隊によって、徹底的に弾圧された事件、所謂2・28事件である。その後首謀者として本省人インテリや有力者達等、約2万人から3万人が処刑され行方不明になったという。
- 4) エドワード・W・サイド『知識人とは何か』大橋洋一訳、平凡社ライブラリー、1998年、28-31頁。
- 5) サイド前掲書、88-89頁。
- 6) レイ・チョウ、本橋哲也訳、『ディアスポラの知識人』、青土社、1998年、44 - 45頁。
- 7) 上野俊哉『ディアスポラの思考』筑摩書房、1999年、7頁
- 8) AC通信の前身は、1998年にマイクロソフト社の『MSN ジャーナル』の政治記事を扱っていた日本時記者らからの誘いで書いていた「ワシントン発:AC通信」であるが、1999年の年末にMSN ジャーナルが解散となり、同記者らが新たに発行した『アジア国際通信』に引き続き書いた「ワシントン発:AC通信」である。2000年に陳水扁が総統に就任し、中国人の強烈な反対と弾圧で政治が難航し始めたので、新しく「台湾丸の沈没? シリーズ (AC通信No.22 2000.11.12 配信)」を書き始めた。『アジア国際通信』に許可を得て辞任し、独自の『AC通信』サイトを2010年12月18日に始めた。この配信には必ず、張の主張に対する意見を述べる欄が設けられており、張と読者との双方向の議論が可能である。読者はどのくらいいるか、張もわからないと言う。2012.4.21の張から筆者へのEメールより。

- 9) 『台湾丸の沈没?』2000年(中国語版2002年)、『ガンバレ台湾丸』2003年(中国語版2004年)、『連宋の欄の真相』2004年、『ラファエット事件の研究』(日本語と同時に中国語に翻訳、2006年)、『台湾丸の難航』2005年、『台湾丸の針路』2010年(日本語と中国語の対訳)が、AC通信の関連著書である。
- 10) 戦後台湾の「脱植民地化の代行」という把握は、国民党政権の執政を、黄智慧による「台湾における日本観の交錯——族群と歴史の複雑性の資格から」(『日本民俗学』259号、2009年、58-60頁)で、戦後の『脱日本化』は、後から入ってきた注民国政府によるもので、被植民者自身による主導ではなかったとしており、若林正文「台湾の重層的脱植民地化と多文化主義」(鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』慶応義塾大学東アジア研究所、2007年、199-236頁)によって概念化され、その代行について、楊子震の「戦後初期台湾における脱植民地化の代行—国民政府の滞在台沖繩人・朝鮮人政策を中心に—」(『国際政治』第162号、2010年などが、その実証研究を行っている。
- 11) 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」(大阪市立大学院文学研究科アジア都市文化学教室編、橋爪紳也責任編集『アジア都市文化学の可能性』清文堂、2003年、130・140頁)とVickers, Edward, “Frontiers of Memory – Conflict, Imperialism and Official Histories in the Formation of Post cold War Taiwan Identity,” in Sheila Mayoshi Jager and Rana Mitter Ed., *Ruptured Histories*, Harvard University Press, 2007, p.211 と黄智慧「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」(『アジア・アフリカ言語文化研究』第71号、2006年、167頁など。
- 12) 若林正文「96年以後——総統選がつくってきた台湾独立世論」(『中央公論』119巻4号、1996年。
- 13) 黄智慧「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」(『アジア・アフリカ言語文化研究』71号、2006年、楊子震「戦後初期台湾における脱植民地化の代行——国民政府の在台沖繩人・朝鮮人政策を中心に」(『国際政治』2010年12月号。
- 14) 揚文魁「『河清』か 台湾独立志向——台・日・米に見る台湾独立運動の歩み」(『アジア文化』26号、2003年。
- 15) 伊藤潔「公然化した台湾の独立運動」(『中央公論』107巻1号、1992年。
- 16) 陳光興「台湾独立運動の終わり——2000年台湾総統選挙後の新情勢」(『インパクション』120号、2000年。
- 17) 林景明「わが闘争記——台湾独立運動にかけた12年」(『現代の眼』1973年11月号。
- 18) 小田滋「主権独立国家の「台湾」——「台湾」の国際法上の地位」(『日本学士院紀要』62巻1号、2007年。

- 19) 趙鳳杉「台湾問題の争点——「祖国統一」と「台湾独立」の狭間で」『筑紫女学園大学紀要』14号、2002年。
- 20) 成瀬千枝子「戦後台湾におけるアメリカ留学（Ⅰ）（Ⅱ）」『交流』634・635号、2001年。
- 21) 陳天璽「台湾系華人移民」『アジア遊学』39号、2002年。
- 22) 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情——台北の日本語文芸運動について」大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学教室編、橋爪紳也責任編集『アジア都市文化学の可能性』清文堂、2003年。
- 23) 上島嘉郎「遥かなり台湾——独立運動にかけた台湾人学者40年ぶりの帰国譚」『正論』339号、2000年。
- 24) 許世楷、盧穂、大島信三「インタビュー 私たちが台湾独立運動に奔走していた頃」『正論』399号、2005年。
- 25) 筆者が「台北俳句会」会員に、俳句を作ってきた会員個人の歴史を記述するため、「俳句自分史」の原稿を募った時の一事例である。そしてこれは、彼自身が付けたタイトル名である。アメリカ・カリフォルニアから「それぞれに違ひそれぞれ落ち葉かな」の俳句のイラスト頁と共に送られてきた。
- 26) 新聞記事文庫欧州(23-150)の中外商業新報1939.9.26-1939.9.27(昭和14)にこの記述があるが、彼の言う全三冊の出版元は分からない。
- 27) 2011.10.27付 張から筆者へのEメールによる。
- 28) 柴川清美「日本語残留孤児の居場所 - 日本統治後の台湾日本語俳句の空間から」『日本学報』大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、2009年、89-113頁。
- 29) 張繼昭『フライデイ・ランチクラブ』新風社、1996年。
- 30) 張繼昭『不幸のカルテ』東京図書出版会、2001年。
- 31) 日本統治下における台湾から日本への留学生は、1945年までに20万人、そのうち大学や専門学校の卒業生は6万人余りと言われ、殆どは帰台によって、台湾の高等教育や社会・経済活動に貢献した。
- 32) 成瀬千枝子「戦後台湾におけるアメリカ留学（Ⅰ）」『交流』634号、2001年、20-29頁「戦後台湾におけるアメリカ留学（Ⅱ）」『交流』635号、2001年、37-45頁。
- 33) 張前掲書、48頁。結婚観についてAndyが述べる所に「僕みたいに、生まれた時は日本人で、中国の教育を受けて、しかも中国人の台湾人に対する差別統治に不満をもってアメリカに渡った人間は、生い立ちが複雑なので、とうてい自分を理解してくれる人なんか見つかるはずがないと思っていた」という箇所があり、その一部である。
- 34) 2011.8.24付 張から筆者へのEメールによる。

- 35) 「俳句に関わる自分史」のひとりは、「基隆港に上がってきた兵士の怖かったこと、何をするか分からなかった。解放令が出てても怖かったし、今でも怖い、公務員の殆んどが外省人だったから、虐げられた。」とも言う。(全回答の一部) 柴川前掲論文、100 頁
- 36) 2011.9.12 付 AC 通信 No.365「台湾人よ、228 を忘れるな」
- 37) 柴川前掲論文、参照。
- 38) 2010.12.18 付 張から筆者への E メールによる。
- 39) 黄前掲書、130 頁。
- 40) 2007 年 11 月 23 日付 台湾の黄靈芝から筆者宛 FAX3 枚中より抜粋。柴川前掲書論文、104 頁。
- 41) 黄靈芝「台湾の俳句 - その周辺ほか」『國文学』2005 年 9 月号、91 頁。
- 42) 2011.8.27 付 張から筆者への E メールによる。
- 43) 台湾の海軍汚職。フランスからラファイエット空母艦を購入するに当たって、死者一人を出すまでに至った事件。
- 44) 若林正文「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」『思想』2004 年 1 月号、108-125 頁
- 45) 若林前掲論文、108 頁。
- 46) 若林前掲論文、109 頁。
- 47) 頼柏紘『茜雲の街』台北市致良出版社、1997 年。
- 48) 柴川清美「日台俳句会の国際俳句的視座による一考察—『なると俳句会』と『台北俳句会』の例をもとにして—」『なると』355 号、2009 年、87 頁。
- 49) 若林前掲論文、110 頁。
- 50) 陳天璽「台湾系歌人移民」『アジア遊学』第 39 号、2002 年、19-30 頁。
- 51) 陳前掲論文、21 頁。
- 52) 陳前掲論文、22 頁。
- 53) 2010.10.18 付 張から筆者への E メール。
- 54) AC 通信 (2010.7.9 配信 No.324)「何故建国宣言なのか」の中の引用であり、そのすぐ後に NY タイムズ掲載の建国宣言全文の日本語訳が載せてある。文章表現は異なるが、AC 通信の内容を含む。(資料Ⅱ参照)
- 55) 2011.9.11 付 張から筆者への E メールの中からのまとめである。「建国宣言発表に至るまで」については、AC 通信 No.329 に詳細な記述がある。
- 56) 16 章「この記事を書くのは、独立宣言の計画が潰されるかもしれぬから、せめてこ

のような計画があったと記録に残しておくためである」と危機感を持った書き出しで始まる。

- 57) 張継昭『台湾丸の針路』(日本語と中国語の対訳)台湾北社、2010年、180頁。『台湾丸の針路』は、目次は中国語で、第1章「生為台湾人深覺慰」(台湾人に生まれてよかった)から16章(台湾人民独立宣言)に亘る。
- 58) 2009.12.9 東サンゲープル日系コミュニティセンターで、ドキュメンタリー映画「台湾人生」(酒井 充子監督)の上映会を催している。その上映後に、Andy・Changの補足説明がある中で、30ほどの質疑応答がなされている。
- 59) Web サイト 映画「台湾人生」ロサンゼルス上映会 @台湾の声:痞客邦 PIXNET。
- 60) 2011年2月8日付 AC通信 No.343「他山の石で玉を磨け」から。
- 61) 楊文魁「『河清』か 台湾独立志向—台・日・米に見る台湾独立運動の歩み—」総合研究誌『アジア文化』No.26、2003年、48頁。
- 62) 『台湾青年』台湾独立建国聯盟日本本部、1960年。
- 63) 伊藤潔「公然化した台湾の独立運動」『中央公論』107巻1号、1992年、250-257頁。
- 64) 林景明「わが闘争記—台湾独立運動にかけた12年—」『現代の眼』1973年11月号、234-243頁。
- 65) 陳光興「台湾独立運動の終わり—2000年台湾総統選挙後の新情勢—」『インパクション』120号、2000年、60-69頁。
- 66) 中華人民共和国政府が、2005年3月14日に採択直ちに施行した「反分裂国家法(日本では反国家分裂法)」を指す。この法律によって、台湾が独立を宣言した場合、「非平和的手段」を取ることを合法化したもので、各方面で議論を呼んだ。Wikipediaより。
- 67) 小田滋「主権独立国家の『台湾』—『台湾』の国際法上の地位—(私の体験的・自伝的台湾論)」『日本学士院紀要』62巻1号、2007年、53頁。
- 68) 陳鵬仁「台湾独立論への疑問」『自由』通号44号、1963年、77-81頁。
- 69) 新井宝雄「講座・中国問題入門 = 根拠なき“台湾独立論”(上)『公明』1972年1月号、82-93頁。
- 70) 新井宝雄「講座・中国問題入門 = 根拠なき“台湾独立論”(下)『公明』1972年2月号、138-150頁。
- 71) 上島嘉郎「遥かなり台湾—独立運動にかけた台湾人学者40年ぶりの帰国譚—」『正論』No.339、2000年、322-333頁。
- 72) 『正論』編集長大島信三が夫妻のインタビューをし、「私たちが台湾独立運動に奔走していた頃」の聞き取りを掲載したもの。『正論』No.339、2005年、148 - 158頁。

- 73) 『朝日ジャーナル』1989年2月8日号の36-39頁に、沖縄生まれの安里英子が書いた記事で、台湾に注目すべき変化が起き始めているとして、台湾独立運動の高まりを取材している。
- 74) 若林正文「96年以後一総統選がつくってきた台湾独立世論」『中央公論』119巻4号、2004年、98-106頁。
- 75) 『NEWSWEEK』2007年2月28日号、31-32頁には、求心力低下に悩む陳水扁総統は台湾人意識に訴えかけて、独立志向をあおるのに躍起だが、人々の反応は以外に冷ややかだと台北駐在の記者ジョナサン・アダムスが記す。
- 76) [AC通信：No.170] 悲劇的な台湾と現状 (2010/12/13)。
- 77) 台湾の有名な李筱峰という政治評論家が最近、断筆宣言を発表した。声涙下る名文で、今後は政治論文を書かず専門の歴史研究にいそしむとある。李教授は台湾で30年も政治論文を書き続け、台湾の政治評論を書き続け、やがて失望してやめて行った人がたくさんいる。私が台湾問題を書き始めて12年になる。日本語で書いているから台湾の読者は少ないし、日本語のわかる読者も多くはない。私だって李教授のように意気阻喪してやめよう思ったことも何度かある。しかし私は止めない。
[AC通信：No.367] 断筆宣言 (2011/09/24)。
- 78) 張前掲書『台湾丸の針路』、184頁。
- 79) 東京テレビのある記者からは、特にTPPの解釈はその通りではと感服しました(2011.11.26付AC通信No.375「TPPは戦略の一環である」)に対するこの記者からのEメールの転送)とか、ラファイエット事件に対する読後感想(2011.12.8付張から筆者へのEメール)が届いて励まされ、産経新聞上海支局長からは「米、大和選挙介入の理由」と言う記事(2012.1.22付張から筆者へのEメール)が張に送られ、張のAC通信No.381の裏書になることに自信を得ている。
- 80) 2012.2.19付張から筆者へのEメール。
- 81) 2011.1.31付張から筆者へのEメール。AC通信No.334にも掲載あり。
- 82) 何義麟「『日台親和』の虚像と実像 植民地支配の歴史経験は国際協力のモデルか?」『インパクション』120号2000年7月号98頁。

資料

I 台湾台北にある「友愛会」にて、張が講演したときの資料。

「友愛会」は、日本語で諸事について歓談する会である。

一粒の虹

Andy

台湾を離れる前日は雨だった。夜中から突風と雨の音がひどくなり、屋根から垂れた電線が悲鳴に似た音をたてて一晩中窓に当たる雨の音を聞きながらうつらうつら寝ていた。明け方に起きて灰色に濁った空を見ると雨雲が北から次々と押し寄せてくるのが見えた。屋根から垂れた電線はときにはライオンのように低く唸り、ときには空襲警報のサイレンのような音を立てていた。

金曜日まで暑い日が続いて、十月の末と言うのに秋の兆しはなく、このたび出版した「台湾丸の難航」を台湾と日本の友人に郵送するため、たくさん的小包をカートに載せて何度も郵便局を往復し、ボロシャツが汗で背中にべったりくっ付いた昨日の炎天が嘘のように思われる。

十二階の窓から眺めると下界と言う言葉があてはまる様に思われる。木々の梢は視界のはるか下の方で、時には風の応援団のように激しく動くかと思えば、時には水の重みにひれ伏すようにうなだれる。土曜日の朝は行き交う車も、いつもなら大きなエンジンの音を立てて走ったり止まったりするバスもなく、行き交う人のいろいろな色の傘が、まるでノロノロ歩く天道虫のように見える。昔は傘の色といえばほとんど黒い「こうもり傘」だったが、いつの間にか赤や青や銀色やらが主体となって黒い傘は少なくなった。雨に濡れた黒いアスファルトの上を色とりどりの丸い背中の天道虫がゆるゆる動く。

午後になっても風と雨は少しも衰える様子はなく、部屋にこもって窓から下界を見るしかなかった。でも帰ってきてやるべき仕事はみんな済ませたので安堵と満足感で心残りはなかった。

アメリカから帰ってきて三週間で、本の印刷が一週間、蔡焜燦さんのお陰で李登輝さんと会うことも出来たし、他の友人も手分けして本を受け取ってくれ、会いたい人には会うことが出来た。本を一千冊印刷して六百冊を人々に配り、残りの四百冊は郵便小包で郵送する。これも忙しいスケジュールの合間合間に封筒に入れて宛名を貼り、郵便局に運んで

いく作業はかなり重労働だったが、これも無事に済んだ。三週間の間にこれだけやれたのは自分ながらよくやったと満足だった。計画通りに仕事を済ませた満足感のご馳走を腹いっぱい食べたような感じがする。

夕方になって、窓から外を眺めると雨雲の塊が東北から南西に向かってどんどん流れてくる。窓の南端に台北 101 ビルが見えるが、ビルよりも低い雨雲は次々とビルにぶつかって二つに別れ、ビルの先端が見えたり見えなくなったりする。101 階の建物はどれぐらいの高さかわからないが、だいたい 500 メートルだろう。そうすると流れてきてビルにぶつかる雲は 300 メートルぐらいの高さらしい。切れ切れの雨雲なので、下界を見ていると太陽の光が雨粒に反射してキラキラと輝き、時には小さな虹を作って行き交う人々の上に降りかかるのが見える。

雨雲の高さが 300 メートルとすれば、雨は地上 300 メートルのところで傘になり、そこから地上に落下してくるわけだ。雨が出来てから地面にぶつかるのは何秒ぐらいだろうか？これは高校の物理でならったものだから計算できない事はない。

$$h = v_0 t + \frac{1}{2} g t^2$$

この内、初速はゼロだから、 $v_0 = 0$ 、

高さ h は 300 メートルだから、

$$300 = \frac{1}{2} g t^2$$

g は重力加速度で 9.8 だから、その半分、 $\frac{1}{2}g = 4.9$ 、四捨五入して 5 とすると、

$$300 / 5.0 = t^2 = 60.0$$

60.0 の平方根は・・・ハッパ 64、シチシチ 49・・・だから 8 秒より小さく、7 秒より大きい、約 7.8 秒。つまり、雨が 300 メートルの高さから落下して地面に着く時間は約 7.8 秒かかるということか。

十二階に窓から外を見ながらこれだけを暗算でやれたのだから、あんがはまだボケていないのかもしれない。こんな事を考えながら雨を見ていると雲間から射してくる日光に雨がキラキラ光っているのが見える。

「雨の命は生まれてから死ぬまで 7.8 秒」・・・人間の命に似ていないこともない。人の平均寿命を 78 歳とすれば雨の落下の 1 秒が人間の 10 年に相当するわけだ。

「雨の一秒は人間の十年」・・・イチニサンと数える間に十年が過ぎる。この比喩はなかなか面白い。「貴方はこの一秒の間にどんな事をしましたか？」と聞いたら誰でも目を白黒させるだろう。それよりも自分を振り返って見れば、この十年の間に何をやったのだろうか。「人生五十年、化天ノウチニクラブレバマボロシノゴトクナリ」と信長が好んで謡ったように、あっという間に「貴方の 7.8 秒」が地面に到着する。

人によってはキラキラ光り輝く一生を送る人もいるし、目に見えない雨粒のような一生もある。人さまざまというが、

できれば光り輝く人生であったほうがよい。私は一人の人間だから、私でも一粒の虹を持っているし、誰でもそれぞれ自分の虹を持っているはずだ。

一粒の雨一粒の虹を持つ

下を見るとちょうど太陽の光が強くなってきたので、下界に丸い虹が出ている。雨粒のひとつひとつが光を屈折させて大きな虹をつくる。雨粒は次々と落ちていくのに、あとからあとから落ちてくる雨粒が同じように光を屈折させて、虹は動かないように見える。

一粒の雨を一人の人間の一生と思えば、多くの人間が集まって一つの事に努力すれば大きな虹を織り上げる事が出来る。多くの台湾人が集まって共同で努力すれば「独立台湾」と言う大きな虹を作れるはずだ。

II NY タイムズ掲載の建国宣言 2010年7月10日 NY タイムズ広告欄の原文

II-1



II-2 掲載前日の AC 通信

II-1の台湾人民建國宣言のNYタイムズ広告掲載について

文中、台湾独立宣言の日本語訳を含む(強調部分)

[AC通信: No.324] Andy Chang (2010/07/09)

[AC論説] No.324 台湾人民建國宣言

3月にAC通信No.315で台湾人の宣言を新聞広告に掲載する計画を書いたが、あのときから4ヶ月たって、ようやく7月10日にニューヨークタイムズで「台湾人民建國宣言」を掲載することになった。

これは台湾人が世界に向けて独立建國の意思を発表し、各国の支持を求めたものである。終戦から65年たって、台湾人が初めて建國の意志を表明した記念的な宣言である。ニューヨークタイムズはアメリカ全国のスターバックスで購入できるので、興味のある方は記念に買うことをお勧めする。

この歴史的な宣言を出すまで、いろいろな紆余曲折があった。同じ台湾人でも発表の目的や文面に異議を唱える人、意味のわからない人がいて、計画を始めてから掲載までに半年以上もかかった。これから書く経緯は、すなわち台湾人如何に思想的に混乱し、建國に団結尽力するのがどんなに難しいかを表している。

●なぜ建國宣言なのか

終戦から今日まで、何人かが「独立宣言」を発表している。しかしこれらの宣言は台湾人に向けて独立を呼びかけたもので、台湾人民が世界に向けて建國の意思を発表した事は一度もない。ジョン・タシク(John Tkasik)氏など多数の外国政治家、評論家が「台湾人はなぜ自分で建國宣言をしないのか」と述べているのに、誰も気がつかない。

人民に向けて我々は独立すべきだ、権利があると「呼びかけ」ても、人民が世界に向けて「我々は建國する」と意思表示をしない。従って世界諸国は「台湾人は何をしたいのか、ハッキリ言わなければ援助のしようがない」と言う。私はこの事実に気がついたから独立宣言を書く計画を立てたのである。それでも後述するように仲間の意見が揃わず異議がたくさん出てきた。

「独立ではない、建國だ」と言うことが大切である。独立は中華民国から独立することである。サンフランシスコ平和条約によって台湾の地位は未定となり、台湾人民は国籍をなくした。だから台湾人は中華民国から独立するのではなく建國するのである。これは重要なことで、この違いを理解していないから台湾人は団結できないのである。

●建国宣言全文(日本語)

1945年日本は連合軍に無条件降伏した。1951年9月、日本国は米国など48カ国とサンフランシスコ和平条約を締結した。1952年4月28日、条約の発効により臺灣及び澎湖群島は未確定領土となり、同時に臺灣人民も無国籍となった。臺灣及び澎湖群島の主権は当時六百万の臺灣人民及びその子孫に属する。

臺灣人は蒋介石が中国大陸から連れてきた中国人ではない。中国人は長年臺灣に住んでいながら臺灣を国と認めない。中華民国は蒋介石が臺灣に持ち込んだ亡命政府の集団で、多くの国は既に滅亡した国と認めている。中華人民共和國(中国)は臺灣と澎湖群島が中国領土であると声明したがこれは事実ではなく、国際法的根拠はない。台湾人民は絶対に承認しない。

臺灣人民は強い意志をもって「臺灣」と呼ぶ独立国家を建設し、互恵平等な国際関係を建設することを世界に宣言する。臺灣は臺灣人民の所有するものである。我々は天賦の自決権を行使して臺灣人の民主国を建設する。我々は世界各国及び民主を愛する人々の承認と熱烈なる支持を希う。

●台湾人の定義

SFPTの締結によって台湾は国際地位を失い、人民は無国籍となった。だから当時の600万の台湾人民とその子孫には建国する権利がある。

文章は簡単明瞭に書くのがもっとも難しい。建国宣言は誰が(who)、なぜ(why)、何をするか(what)を宣言するのである。簡単に目的を述べるだけでよく、歴史的意味や地理的環境、中国人の影響などを書く必要はない。我々は教科書をつくるのではないし、外国人を教育するわけでもない。台湾人は無国籍である、建国する権利がある、意思がある。そのことだけを誰が読んでも理解し同意してくれるように宣言するのだ。

ところが多くの台湾人は台湾に住む中国人にも建国に加わる権利があるという。台湾に住む中国人の殆どが中華民国を支持し、台湾建国に反対だ。極小数の中国人賛同者を入れたがるのは中華民国の心理的影響を受けた台湾人である。中国人の影響を受けたものは宣言の「600万の無国籍台湾人(people of Taiwan who lost their nationality)」に異議を唱えて、「2400万の台湾の住民(people living on Taiwan)」全員を入れるべきだと言う。

台湾人は内弁慶が多い。外省人の一人二人が独立建国に賛成と云えば有頂天になって外省人も入れろと騒ぐ。「台湾人は中国人ではない」と云えば大賛成なのに、中国人を排除すると「中国人に睨まれる」から台湾に住む中国人も入れろと言うのだ。

以下省略

Ⅲ イエーツ氏への手紙

Andre C. Chang
6 Calle Anacapa
San Clemente, CA 92673
Tel: (949) 361-2136
September 25, 2011

Mr. Steven Yates
1425 K Street, NW, Suite 350
Washington, D.C. 20005

Dear Mr. Yates:

I watched your interview with FAPA' s president Darice Lee in Los Angeles with great interest. I also read your speech "Asia-Pacific Regional Security and Peace in the Taiwan Strait" which you had presented at "Taiwan Strait Safety and Peace Solution Symposium" in Taipei on September 7. I agree with your Part V, Recommendation for a peaceful Taiwan Strait, and hope your recommendations will be accepted by the United States in the future.

My name is Andre (Andy) Chang. I live in California, and I have my own web-magazine in Japan for 12 years. I write in Japanese but many articles are translated in Chinese. As an independent thinker and writer, I am not a member of any political party, like DPP, FAPA, or Roger Lin' s Taiwan Civil Government.

I agree with many Taiwanese that Taiwan is still not a nation, and Republic of China is not a legitimate government. But I do not think independence can be achieved by Taiwanese alone. Likewise, the United States will not be able to resolve this issue alone. It should be solved with other problems in Asia Pacific region.

I believe People of Taiwan have the right to self-determination. But the United States do not support the self-determination on the reason that it may disturb the stability of Taiwan Strait. The issue of Taiwan Independence has been put on hold for 66years. It is difficult for the United States to solve this problem alone, and it is difficult for Taiwanese people to struggle alone also.

The unsettled territories in South-East Asia, which Japan had renounced in the Article II of San Francisco Peace Treaty (SFPT) should be resolved altogether by all signatory countries and only those countries signed the Treaty. This will settle the not only territory problems, but also bring peace to the Asia Pacific region. This solution will be a great advantage to the United States. Please read the attached paper and tell me what you think. My e-mail address is bunsho2@gmail.com.

You said: "a great power will never stop until it has achieved hegemony. China is striving to be that great power, and it will not stop until it has driven the United States out of the Asia Pacific region." How true.

The question is how to deal with China's unreasonable ambition with reason. In my opinion, the key is to get together with the United States and all involved nations to solve the problem.

You explained the history of the United States China policy in your speech, which in short had gradually evolved from "Containment" to "Commercial Partnership" to "Status Quo." In short, the China policy is gradually losing steam. China has no intention of obeying the world's common rules and honesty.

I suggest the next China policy for the United States is "Law and Order." "Law" is to clarify unsettled territories with all SFPT signatory nations, and "Order" is to form Asia-Pacific Nations Union (ASPACNU) to strengthen the rule of territorial sovereignties. The basis for this is already set in the "Declaration of the Conduct of the Parties of the South-China Sea" which was signed by China and many ASEAN nations in 2002.

Personally, I have been trying to form a PASEA (Peace Association of South East Asia), which is an international civilian group to build a petition campaign in Taiwan, Japan and other ASEAN nations. I have gathered a few scores of names in LA and Tokyo. I hope my petition drive will gather momentum after Taiwan's election.

Of course it would be superbly effective if I could ask congress directly to form "A committee to resolve Asia's unsettled territories." I hope you can help me work with congress to form a committee

Sincerely yours.